家庭雜誌

第参拾九號

國民新聞

國民新聞は百尺竿頭一歩を轉ぜり

國民新聞が、如何に卓厲風發、以て支那征伐に對して、其の平生蓄積したる、潜勢力を發揮したるかは、國民新聞自から之を證して餘りあり。今や時機層々相迫る、如何に國民新聞が、其の大勢に乘じて、江湖愛讀の君子に酬ゆるかは、今後の紙上に徵して之を知れ。

(第一)國民新聞は**電報**新聞たる事　郵便通信の迂路を捨て、**急電迅報**の**直截**手段を取らんとす。刻一刻、機一機、活劇、活勢、歷々として紙上に躍るべし。

(第二)**第二軍**の**從軍**、及び**海軍通信特派**の事　此の事に就ては、國民新聞、既に成竹あり。今纔述せず、天機を漏らすの恐れあれば也。

(第三)**臨時議會**の事　廣島に召集せられたる議會は、短期なりと雖も、國家興廢存亡の據りて判する大事件なり。我社は**主筆德富猪一郎**自から之を**擔當**し、敏腕鋭眼の記者數名を特派し、以て生龍活虎の活劇を、飛電迅雷に托す可し。

目下各地に特派したる通信員は左の如し。

- 從軍　久保田米僊、阿部充家、菊地謙讓
- 朝鮮內地探險　松原岩五郎
- 仁川　愛民生
- 京城　天涯生
- 釜山　鑑湖生
- 大本營地　德富猪一郎、平田久、深井英五、橫澤三次郎、芳野駒彥

其他更らに出發の途に上るものあり。又は其の大勢の推移に隨ひ、出張の地を變更しつゝあるものあり。又た事宜によらば、更らに幾多の特派員を出張せしむることある可し。其の仔細は國民新聞紙面に追々發表す可し。

●一ヶ月三十五錢三ヶ月壹圓一ヶ年三圓九十錢　地方一ヶ月に付郵稅拾三錢●廣告料(一行二十二字詰)一回拾三錢二回以上拾二錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調合シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓肺病、貧血、病後衰弱、小兒ノ衰弱症及氣力衰ヘタルモノニ最好最良ノ調合物ニテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所

米國貿易商會

橫濱廿八番

神戸十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配合ナル

スコット乳菓

四版

竹越與三郎著

支那論

定價拾錢　郵稅二錢

天下の同情は遂に四版を重ねしむ

各新聞は如何に許せし乎

女學雜誌は曰く『流麗雅潔の筆を揮つて一瀉千里の文を行る、間ま堂々大政事家の識見を示す、戰後の要償日佛露三國同盟の策、志士の猛省を促す』新朝野は曰く『著者が如何なる抱負を以て、此の冊子を著はしたるかを想見すべし、篇中の諸論皆奕々として紙上に躍り、一讀快哉を呼ばしむ、就中我輩の最も奇警とする所は、同盟論は何を覷し得たる乎。二十世紀の新權力平均にあり、其文品に至ては筆々靈快、字々金石の韻あり』毎日新聞は曰く『得意の奔放優麗なる筆を以て大國の大抱負を描出し人をして快と呼ばしむ、日露佛の三國同盟を說く處歷卷の文字也』報知は曰く『我國の清國に於る一は文明一は蠻野、進取と退歩、到底共に東洋に並立す可からざる所以を說き皆過去の事實と將來の推理に據りて言を立つ倘ほ其「我軍一たび海に浮ぶの日は世界の舞臺に上るの覺悟なかる可からざる也」との數語に至ては恐らくは此著に於ける神髓ならん』大坂朝日は曰く『日清同盟論の迂謬を嗤ひ兵火に非んば清國の惰眠を醒す能はざるを說き最後に日露佛の同盟を以て我が清國に對する大希望を貫ぬかんとしたるが如き策士胸中の蘊蓄する所夷の思ふ所に匪すと謂ふべし』

四版には歐洲勢力東漸地圖清韓實用地圖を添ゆ

發行所　民友社

東京市京橋區日吉町四番地

民友社編纂 日清韓三國實用明細地圖添

國民新聞戰地特派畫伯 米僊及米齋 挿畫

本月十一日發兌

日清軍記

定價拾五錢 郵税四錢

端を東學黨の亂に起し平壤の大勝に終る 日支衝突の事情、京城の小戰、南洋海の海戰、成歡の戰、凱旋、平壤の大勝、朝鮮の風物人情に至るまで歷々掌上に見るが如し、其文は平易流暢にして恰も太平記を讀むが如し特に久保田米僊及米齋兩氏が獨特天縱の彩筆を以て親しく其警眼に映ずる所を描き繪畫數十を挿みたれば、此種の著述多しと雖も其正確にして趣味あるは此著の右に出るもの稀ならん。

◎日韓清三國實用明細地圖

虛修を勉めず、實用を旨とす、用意周到、電信線あり、鐵道線あり、海陸里程表あり。世上滔々たる中にて超群絶倫と爲す。

右は購讀者諸君の便宜を料りて、特別廉價にて發賣す、

一枚壹錢五厘 郵税一枚以上七枚まで一錢。以上七枚を增す毎に二錢を追加す。

されば可成多數申合せ注文相成り候方便利なる可し。尤も注文は一切前金を要す

發賣所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		郵稅
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）前金	五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）同	金一圓	地方共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　有馬俊彦
編輯人　[illegible]太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十七年十月十日發行

家庭雜誌第參拾九號

目錄

社說

科學

文藝

家政

雜錄

時事一斑





社説

躰育の事

人誰か子を愛せざらん。子を愛して誰か其幸福を欲せざらん。其幸福を欲して誰か其手段を盡さゞらん。而して世實に其手段を盡して却て知らず識らずの間に其幸福を破壞しつゝあるものあり。世に姑息の愛と稱して、其子女をあまやかすの極遂に之を我儘者にし、或は餘りに暖かに衣せて却て皮膚を弱くし、少しの寒さにも感冒に侵さるゝ如きものとなし、或は美食を欲するがまゝに與へて其腸胃を害し、所謂食傷せしむる如き等、是なり。

然れども此等は事の至て見易きものにして、少しく注意するものは能く其過を避くべしと雖、其智育德育を責るの餘りに、其躰育を忽せにするに至ては子女敎育に注意するものゝ却て陷り易き過誤なりとす。

例之ば幼稚園時代の小供に文字的の敎育をなし、若くは初學入門の子女に過當の學業を奬勵し、其學級に於いて首席を占め、又は試撿に褒賞を得るを過賞するなど、渾て躰力にふさはしからぬ智力の發達を喜ぶは、其實智力を傷損するものにして、取りも直さず人を小熟せしむるものなり。神童は二十にして凡人に劣るといふ諺あるに係らず、誰も彼も其子女を神童にせんとするは誤れるの甚だしきものにあらずや。

是れ啻に家庭に於て然るのみにあらず、敎育を其職とする學校に於てさへ往々に此弊に陷ることあるは決して珍らしからず。幼き兒童に過分の科外講習を課し、家に歸りて斯く〳〵の事を温習し來れ、斯く〳〵の文

章を作り來れなど命ずることあるは、要するに敎育の成績が終身の行爲に在ることを忘れて、目前の試驗に在りと以爲へるより生ずる誤なり。

學校に於ても家庭に於ても此弊に陷り易きこと智育に於て然るのみならず、德育に於ては特にこれを甚しとするなり。世の父母若くは敎育者は、從順穩和の德操を實際の價値よりは格外に重視し、甚しきは大聲疾走抗論强辨するを以て一概に不德義視し、成人しからずとして之を譴責するものさへあり。加之或は卑屈と從順とを混視して、卑屈を奬勵するに似たるものもこれ無しとは謂ひ難し。

去れども其大なる繆見なるとは言ふまでもなきなり。卑屈は服從せざる所なきも、從順は道理に服從するの外復服從する所あるべからず。道理なきの所は往々に父母敎師の命令に抗して其不當の宣告を辨訴することあるも妨げざるべし。獨立自治の精神を養ふことは時として從順の德操を養ふよりも大切なり。唯從順と卑屈との差異を辨じて、道理の在る所はあくまでも之を嚴守せしめ、以て一致協同の精神と秩序の習慣とを養ふをつとむべきのみ。

且つ其智育德育にして其度に適すれば大に躰育の發暢を助け、以て相扶立すへきは固よりなれども、過度の智育過度の消極的德育に至ては常に躰育に反對するものにして、過度の智育は彼等が軟かき腦髓を憊耗せしめ、所謂、從順的穩和的の德育は躰軀の强健を妨害す。皆間接に健康の敵たるなり。

健康は智識の母なり、德義の基なり、都ての幸福の始なり。躰育は智育德育より先ならざるべからず。健全なる精神は、常に健全なる躰軀に宿ると知らずや。

昔は封建武治の世のならひとして、敎育の一半は武藝なりしが爲め、知らず識らずの中に躰育をなしたること大なりしも、今は兒童の躰育は學校に於ける躰操と

學校外に於ける自由遊戯との二者外にあらず。而して學校に於ては往々に體操を蔑視し、家庭に於ては往々に自由遊戯に反對し、勉めて彼等を講學に奬勵するの傾きあり。是れ父母教師たるもの丶大に注意せざる可らざるものにして、容易ならざる大切の事なり。

方今世界萬國文明進歩の途に立て、其間國と國との爭急なるのみならず、人種と人種との爭は更に急なり。人と人との爭はまた急なり。而して人と人との爭に於ても、人種と人種との爭に於ても、國と國との爭に於ても、常に其勝利は健全なる精神に歸すべく、健全なる精神は常に健全なる躰軀に伴ふべし。況や我々は今方に世界の東に「大なる日本」を打建つべく事に與國の大業に從ひつ丶あり。此時に當て我々日本人の躰格は次第に衰へ行くものに似たる顯象あるは、最も憂ふべきの事柄にして、最も救濟せざるべからざるの一大事にあらずや。世の父母教師たるもの、大いに意を躰育に用ゐて可なり。

科學

塵埃の奇談（三）

腐蝕がらす製造者

昔かしは腐蝕硝子を作くるに、酢を用ちひけるが、近來は石英とて、燧石や、水晶や、瑪瑙の如き質の堅たき石の細粉を用ひて、硝子を磨するに十分内至十五分にして全く光艶を去ることを得るに至たれり。但しこの新發明は、古るくより自然が實行しつ丶來りし法を燒き直して、人が眞似を爲せしに過ぎざるなり。海岸の高燥なる所に聳へたる美麗なる西洋館を建築して、ほこりし老人あり、家の出來上りて、硝子窓をはめ、朝夕外を眺めて樂しみけるが、一日大風のありし翌日、常の如く窓により外を眺めんとせしに、いつの間にや、

硝子は曇もりて、外見へずなりしかば、下女に命じて拭ぐはしむるど雖も、少しも元の透明に返らずして、益々見へずなれり。こは硝子屋が、質の粗悪なるものを賣り付けしならんと怒り、更らに他より求めて更へしめけるに、不思議や、又たも程なく見へずなれり。いぶかりながら三度迄で更へしめしに、いつも大風の起りし後には、必ず透明を失なひけり。人々はその家を指ざして化けもの家敷と云ひ、老人は俄わかに高慢の鼻を折りたるが、そは自然が親切にも、老人の硝子に腐蝕法を行なひけるなりとは、後にて知られたり。

波のために打ちよせられたる濱邊の砂、大風のために捲き上げられて、空中に舞ひ上がるや、無益に下るとは限らず、何にかぎらず、手當り次第に磨きて歩るくが故に、松はそのために衣をはがれて、裸となり、石はそのために垢を去られ、硝子はそのために腐蝕めらる。只に腐蝕するのみならず、時によりては、ために打ち破ぶらるゝことあり。綱石は金剛石と大差なき堅固なる石なれども、ある大風のために二十五分間にして一吋五分の穴を穿がたれしとあり。鋼鐵の固たきは誰れも知る所なるべし。その鋼鐵の二分の厚さあるものを、十分間の大風によりて、表より裏迄でつらぬき通せしもあり。又た五分の厚さある大理石に、僅か一時間を以て、大彫刻を爲し、數日間の職工の業も、かくは出來まじと驚きしとあり。餘りに非常絶類の話の樣に思ふ人々は、その實際を見給ふことは、今にてもむつかしきとにあらず。風の強よき地方の岩山に至たり、精細に岩石の烈け目と形とに注目する時は、その山の風の方向を知り得べし。ベルマダスと云ふ所には、大なる岩の面に石工の鑿を以て彫刻せし如き、美術的の彫刻を風のために刻ざまれたり。ハルド島には三個の巨岩、少しもたがはざる全一なる形を作くられしものあ

り。其他鎗の如き、矢の如き、刀の如き、種々なる形を爲せる岩石は、所々の山上にて見る處なり。之れは砂の混じたる風が、一方より磨り上ぐると、仝時に、又た他方よりも、磨き上ぐるが故へなり。その磨く度毎に、更らに新らしき塵は造くられつゝ飛ぶを知るべし。

風が大彫刻家の事業を爲す間に之に劣らず競爭するものは水なり。祭日にても、日曜日にても、祖父の若かゝりし時代より、我孫の孫の末迄、常に變わるとなく、いそがはしきは波なり。恰も無數の大蛇が口を揃ろへて呑べきものを探がす如く、磯邊をはい廻るものは波なり。もし一の呑べきものを見出だす時は、すかさず之を呑み、もし無き時は、躰を以て大岩にぶつかり、たとへ少しなりとも、得る所なくしては止まるとをせず、時に大岩の大片を欠ぎ取るとあり、さて欠き取りたる石片を如何になすやと云ふに、大なる腸中にて運動させつゝ、消化するために、之を打ち砕だく也。

世界中に於る最も大なる岩の一枚板は恐らくパタゴニヤの東海岸、六七百哩の間に横たわれるものに勝るものはあらざるべし、その幅ばは平均百哩にして、厚つさは五十呎なりしが、小石はだん／＼積り來りて、二百哩以上を增加したり。

波は荒れて大岩を砕だき大岩は破れて小石となり、小石は更らに細微なる塵となり、かくて硝子をみがくの磨き砂となる、宇宙の働らきは大なるかな去れど塵の働の一として、算ふべきものは、此外にもあり。之は雨なり。雨の地に下だるや、一部は蒸氣となりて、上騰すると雖へども、多分は又た地下に吸い込まる。さてその吸い込まれたる水は、段々と下り下る内に、地層の緻密なるものに遇ひて、そこより下には行くとを得ざるに至たり、止む事を得ず、横に／＼と走しり始しむ。幸いにして近邊に出で口あれば可なりと雖も、

もしなき時は、時に百五十哩位の間は、地下に川流を爲すとあり、雨後井戸水の增すは、水の地下に吸ひ込める、例なるは、人々の知り給へる如し。地球がテーブルの如く、いづく迄も平面ならんには、水の出で口は遂ひに無かるべきも、幸ひに山あり、丘あり、谷ありて、平面ならざるが故に、山の上より吸ひ込みたる水は、谷の測面より泉となりて迸り、高かき地面の水は、低くき地面より走しり出づるを得べし、地すべりと云ふものあり。海濱其他の砂地に於ひて、地が分外の水を含くめる時持ち堪たへずして、低くき地等へすべり行くを云ふ。地すべりは時に恐るべき大なる穴を造るとあり。さて水が地上にかぎらず、地中にかぎらず、流通するに際しては、多分の粘土、其他の物を持ち運ひて地中の變化を起すの原因をなせり。

石を食する植物

動物には鐵を食する虫あるとは、兼ねて聞きけるが、植物の中にも、之れに劣らざるものあり。即ち石を食しては長するものあり。石を食すと云へば、さぞかし大なる植物ならんと思へども、實は豫想外に小さき植物、即ち苔ぞ其物なり。庭の踏み石の上に、僅かに顯われたる一點の穢れものを打ち捨つるに、二三日にして靑くなり、長くなり、遂に一寸以上のびろうどの如き、植物となる。此の苔は如何なる法方を以て、堅たき石を消化なすやと云ふに、苔の用ゆる利器は、濕氣なり、濕氣は乾燥せるものに比して、數倍の酸化力あるが故へに、石をも能く酸化せしめ、腐敗せしめて、食物と化す。苔は最も好んで花剛石、盤石、火熔石等の上に生長し、時には固着して中々に取りも得ざるとあり。石長生と云ふはしのぶ草に似て、やさしき草にして、人に例ぶれば、良家の令孃が、振り袖でを着けたるたをやかなる様あり、去かれども、その強よきとは、根の下し處なき時は、自由に植木鉢を破るの

力あり。一と朝、庭の蹈み石の少こしく持ちあがり居るを見たり、誰れかいたづらに、小石にても下につめしならんと思ひつゝ、持ち上げんとせしに、中々重き石なりき。漸やくにして移つし見れば、豈に計らん一の小石だも見ざるかわり、無數の木の子生ひ繁り居たり、石の上りたるは、全くこの木の子の力なりとは、後にて知られたり。

又た一つの面白き談しあり。一本の胡果の木、程ど好く引き臼の軸木の入るべき穴の中に生へ出でけり。如何になり行くべきやと樂のしみて、育だてけるに、木は穴のゆるす盡ぎりは難なく育ちけるが、もはや此の上は一毫の餘裕もなきに至りければ、我等はその木が、根の所計り細そまりて餘のみ生長なすか、さなくば枯死するかと、區ち／＼に批評しつゝ、毎日／＼木の所に行きて視察しけるが、二三週間世話しき事ありて、木の事は全く忘すれ居り、一日思ひ出だして行き見るに、實に奇態、實に驚くべし。木は萬人力を出だして、その石を八寸計りの空中へ持ち上げ、居たり。その石は直經四五尺もあらんと思わるゝ大石なりしに難なく持ち上げし胡果の力ぞ、驚くに堪へたり。

マダカスカルの北西に當りて、アルダブラと云ふ所あり、全躰岩國にして、至る所岩の一枚板なりけるを、不思議にも、年々歳々音なくして自然に、多くの破處を生じ行き、今は島の全躰、殆ど通行するに困難迄でに碎け目出來たり、誰れがその破所を作るやと云ふにメングローブと云ふ小植物の、岩の下に生じて、岩を食しつゝ、進むで、遂に大なる岩を破るによると云ふ。石を化して塵となし、塵をしてまた石を食物となさしむ。何ぞ造化の巧妙なる。

自然の耕作者

一千二百坪の畑には、平均五萬三千七百六十七匹の虫あるを常とすれど、多き處には勿論此の四倍も五倍も

居るとあり、通常の數に隨がふも、一年間に虫が地下の土を地上に持來る分量は、數千貫を下だらず。特に腐敗せる植物を食して、一種の酸素を作くる分量は、中々に少なきものにあらず。

南米ブラシルの首府リオ、ド、ジヤチーロには大なる蟻ありて、バラヒバと云ふ川の底を通じて、トンチルを作るとあり、バラヒバと云ふ川は、殆んどロンドンテームス川位の廣さある大河なり。此河底にトンチルを作るには、多量の土を運び出だして山を作り、かくて人の知らざる河底の塵を、地上に持來る。兎、鼴鼠、其他鳥類が、非常に勤勉なる塵埃製造者なるとは、事新らしく云ふ迄もなけん。されど茲に紙の如き薄き殼を持てる貝にして、岩を碎くの大力を持てる者あるとゝは一言せざるべからず。人々が海の壁と稱して恃のみきつたる大岩も、知らざる間にこの貝のために、縱橫無盡に裂き破らるゝとありと云ふ。

文藝

戰爭雜感

十七年前、城山々頭に砲銃の音沈みて秋風英雄の骨を埋めしより、我日本は歷史繪畵の上若くは大演習の折ならでは戰爭と云ふ戰爭を聞きもし見もしたる事なかりしが今や相摸太郎が筑海の大風に元寇を殲にし猿面郎が高麗の旗風に明朝を震慄せしめたる以來比類なき日清大戰爭は起來れり。日清戰爭は實に國民の戰爭にて政府の戰爭にもあらざれば、陸軍の戰爭にもあらず。海軍の戰爭にもあらず。海洋島の戰に清の艦隊を打破り我帝國の名譽を世界に輝やかしたる我軍艦も、平壤を陷れたる世界に誇る可き我陸兵も此等は皆我國民の清國と戰ふ手足に過ぎず。今回の日清戰爭は、世界にありては實に文明と野蠻の決戰也。東洋にとりて

は、進歩人情自由平和の化身たる可き日本が覇たる乎、頑固腐敗壓制暴悪の化身たる清國が覇たる乎、其の分け目の戰爭也。抑も我日本にとりては、愛する此邦、二千餘年赫々たる日光の如く東洋に輝やきたる此邦、秋空に富士聳へ、春朝に芳野花咲く美はしき此邦、無數の明君賢臣英雄猛夫才媛美人の死して猶香しき骨を藏め無限の歴史と逸事との手に成る美と天の成せる美とを以て充滿横溢せる懐かしき此邦が、一躍して世界の一大勢力となる乎、將た敗國亡國となる乎、其の運命の一擲に賭せらるゝ戰爭也。實に日清戰爭は國民の運命を決する國民の戰爭也。已に國民の戰爭なれば、口數に於て日本帝國の半を占むる婦人は、また應に戰爭の重荷の其一半を肩にす可きは、當然の事也。

或人は云いけらく、日本は東洋の希臘なりと。日本は實にに亞典の才の美と斯波多の骨の強とを兼ね、斯波多の硬直勇武と亞典の文化開明を備へたる國民也。我婦人社會も亦曾て春風に囀づる麗禽の如き才情翩々たるサフフオを有せり、我婦人社會はまた曾て「楯を提げて歸れ、否ずば楯に乘つて歸れ」と出陣の其の子を勵ましたる斯波多婦人を有せり。腹帶引しめ鬼面の兜被りて親ら三韓征伐に出で給ひし我勇武なる神功皇后以來、見よ我歴史は如何に多くの烈婦勇婦を有するぞ。見よ如何に多くの戰物語が薙刀緋甲の女武者によりて飾られ、如何に多くの仇討物語が白綾の鉢卷緋縮緬の襷の孝女によりて粧はれ、袿懐劍の烈女が御家騒動に輝やき、其髮は薄の如く白く額の皺は冬の海の如く波寄る老女の如何に凜として歴史に立つ者多きと。鏡と懐劍とは實に我婦人の魂なりき。夫尊の爲めに身を躍らして千仭の海波を踏み玉ひし操芳しき橘姫より、假令其事は迷妄可憐ものたるも猶其正義と認むる事の爲めに潔く己が最愛の一子を戰場に送り、事破れ運窮まるや慈母の膝下に死なむとて歸れ

る其子の爲めに靜かに沐浴の湯を備へ徐ろに爲めに其髮を束ね、白刄一刺紅血迸る愛子の死骸を一滴の涙なしに見詰め、靜かに跡を清め、然る後白無垢を着け音もなく自刄せる熊本神風黨の幾多の母に到るまで、我婦人は實に春風和日の温情と秋霜烈日の志操をあらはせり。腐敗せる外人エドウィンアルノルド一流の輩は、不幸にも此志操を失ふの非運に陷りし婦人等を弄びて、歸つて得々として日本婦人のやさしき姿美はしき聲親しみ易き氣質狎れ易き擧動を吹聽するも、彼等沒德沒眼の輩は雪よりも白く氷よりも烈しき我日本婦人の魂を知らざるなり。此魂は曾て九重雲深き所に顯はれぬ、曾て武家の奧御殿にもあらはれぬ、曾て鎧一領馬一疋の士の家にもあらはれぬ、曾つて夜雨知らぬ歌吹海にもあらはれぬ、曾て八重葎いぶせき草の舍にもあらはれぬ。今や此魂は實に全國にあらはれつゝあるなり。潔く遠征の夫に別るゝ妻、其遠征の子を叱し勵ます母、其美談は日に新聞の面に輝やくにあらずや。其一子の戰死を聞ひて一滴の涙も目にもたぬ老母、其柱とも生命とも賴む良人の討死の報に接して涙を揮つて子女の教育に熱心なる寡婦、何れか人をして其烈に泣かしめざる。勇壯なる男子は外に戰ひ、清烈なる婦人は内に守る、日清戰爭の着々我勝利となるも亦宜なりと云ふ可し。

肥後熊本の城下千反畑と云ふ所に、年經たる土壁をめぐらしたる屋敷あり。心ある熊本人の此土壁の下を通る毎に、必らず仰ぎ見て感嘆せざる者なし。其土壁は尋常の土をねりて築きたる土老ひ草蒸したる土壁にて、何の見所もなきものなり。其見所なき土壁、何の故に斯く珍重せらるゝかと云ふに、此處に短かき緣由のあるあり。今は二百餘年の昔、天草四郎時貞天主敎徒の大將として德川政府に抗せし所謂島原陣に、肥後侯細川忠利も討手に向はれしが、其家臣に坂本某と云

ふ士ありて主君に從ひ出陣せり。征伐長びきて冬に亘りけるに、坂本の妻女は深く夫の征戰の苦を思ひ、主人は甲冑着けて冬天に戰場に苦み玉ふに、我等獨り煖かき衣服着け煖かき食物を給べ煖かき蒲團に寢ねては勿躰なし、夫の苦辛を身に味ふ一つにもと、即ち一家の娘妹下婢召使一同を引連れ、風雪の中をも擇ず、土を集め土をねり、終に土壁を成就せり。今日に殘るもの、即ち此土壁なり。此は實に些細なる事の如くなれ共、婦人の心がけ、別して事ある時の婦人の心がけは斯くありたきものなり。同情は實に不思議なるものなり。相距る千里の遠きに到るも、同情は糸の如く彼此の間を繫ぎ、電線の電氣を送つて千萬里外の物を刺衝動盪する如く此の精神を彼に送つて彼をして勵ましむ。糧食なきの戰は爲す可からず、國民の殊に婦人の同情は戰に於ける必要上の糧食の重なる一なり。昔者宋に某と云へる男あり、曾て玉門關外に遠征せしに、其妻は家にありて更に愁ふる樣子もなく、日々客を會し宴を爲して遊び戲れたり。時に杜善甫なる者あり、詩を作つて之を諷して曰く、

高燒銀燭照雲鬟、沸耳笙歌徹夜閑、
不思征西人萬里、玉關霜重鐵衣寒、

若し遠征の將士にして其家人の同情なき斯の如くなるを知らば、假令鐵膓の猛夫なりとも、敵打つ太刀の鈍らざらむや。

日清戰爭は國民の戰爭なれば、婦人も亦戰ふ可き事論を待たず。若し夫れ一朝我國運非にして我邦家の危きに到らば、我婦人も或はカルセーヂの婦人の如く雲よりも綠なる髮押切つて弓を張り、或は會津城中の女子の如く槍の長柄踏み折つて敵陣に馳せ向ひ、或はガリバルヂーの妻の如く夫に代つて軍艦を乘り廻はす事も必要あらむ。然れども此は萬に一もある可からざる事、終局の覺悟にて、今日に當り何よりも先づ望まし

きは戰爭に對して、我婦人の同情を有せむこと是也。

我婦人は已に此同情を有せり、獨り遠征將士の家人のみならず、一般の婦人之を有せり。是れ尤も喜ぶ可き所、此同情決して或は之を墮すことある可からず。我婦人の温かなる情愛と烈しき志操との發揚するは、實に斯時にあるなり。大海の廻風は紫瀾を捲き起す、日清戰爭は我國民的精神を發揮し且つ大に我婦人の光輝を輝やかさゝる可からず。

我姉妹は今や大に同情を戰爭に表し、或は自から戰地に看護婦となり、或は金を募りて赤十字社に寄せ、或は戰死負傷者の家族に同情を表し、寺に參る田舍老婆も陸海の大戰の新聞話に聾ひたる耳を傾け、幼稚園に通ふ稚女兒も戰爭の錦繪を喜び見る。我遠征の陸海軍は、續々後詰の軍隊と糧食とを有する如く、實に全國民の意思同情を背に負ひ、また温かなる婦人の同情を有せり。同情は或意味に於て實行なり。實に我姉妹も亦日清戰爭を戰ひつゝあるなり。

然れども玆に一の忘る可からざる事は、戰爭と云ふ事也。回々教の教祖マホメッド云へらく、天國は劍影の下にあり」と。古人また曰く、人生は戰鬪也」と。日清戰爭は實に我國運命の決する大戰爭なれ共、此戰爭と同時に戰はれつゝある戰は數ふ可からず。船人は海と戰ひ、鑛夫は土と戰ひ、矯風家は惡習汚俗と戰ひ、無邪氣なる小供は讀本の六ケしき文字と戰ひ、高倘なる哲學家は隱れたる眞理と戰ふて之を擒にせむとし、自から脩むるの士は吾が方寸の私心と戰ひ、家を治むるの婦人は不秩序浪費と戰ひ、國を憂ふる大政治家より秋の夜風に襤褸の膚わなゝかす花兒に到るまで、渾ての人は渾ての場所に於て渾ての戰を戰ひつゝあり。

宇宙は一の大戰場にして、人間は渾て戰爭人形、歷史は渾て軍記、形而上の事形而下の物皆是れ戰爭の現象ならざるはなし。要するに光明と暗黒との戰爭、是れ

宇宙に徹し古今に亘るの一大目的一大事實、日清戰爭の如き亦實に其重なる一部の現象なり。左れば我姉妹は國民として日清戰爭に同情を有し應分の盡力をなすと共に、亦個人として時々刻々其居る所其立つ所に於て各自の戰爭を爲す事を忘る可からず。即ち國民としては光明の先鋒隊として、暗黑の清國を擊ち、個人としては光明の一兵士として吾方寸の中なる敵、身を襲ふ敵、家を危ふする敵、及び渾て暗黑の支配に屬する敵と戰ふことを忘る可からず。隱居せる左り團扇の老嫗も、家を治むる婦人も、學を脩むる學生も。精神は一なれ共、形は變ず。二千年來赫々たる我日本婦人の日本魂も、其凛烈清高の氣魄こそ時に依て變ぜざれ、其の形にあらはるゝ所は自づから異ならざるを得ず左れば今日に當りては、懐劍を見めかすにも及ばず。槍提げて走出づるにも及ばず、また強て要もなき土壁を築くにも及ばざれ共、唯其精神を維持し、戰爭につきて熱き同情を有し、自ら出でゝ清國を擊たざるも其立つ所に於て其有する所の敵に對し誠實熱心に戰ふは是れ即ち尤もよく戰ふものと云ふ可し。

わが土曜日の夜

茅舍主人

土曜日の夕暮は來りぬ。連日蕭々と降り續ける春雨。此日猶ほ晴れやらず。山々峰々に漲ぎる水蒸氣の彼方より。濕やかに黄昏來りぬ。

小說『うきよの波』を讀み了はりて。暫時頭をかゝへ眼を閉ぢて哀想にふけり居たる吾は。室內の暗くなりしにも心づかざりしが。弟なる人入り來りて。燈つけまひらせん。と言へりしに驚き。ふりかへりみれば。幽闇、寂寥の氣。早やくも吾が書齋にみち居たりけり。

『さて今日もまた暮れしよ。否。吾みづから點けん』

『左樣か』と答て弟は直ちに出でゆきぬ。

されど吾は猶ほ燈火つけんともせず。ガラス越に外面の暮れゆく空に眼を放ちぬ。外に流石になほ明るかりき。



あゝ今日も暮れたるか。吾再びつぶやきぬ。かくて『うきよの波』の中なる一句を何心なく口のうちに操返したる時。わが心哀しき想ひにみたされぬ。見やる彼方の峰の上を濃き雲の一團。闇と雨とを包みて。飄々と掠め行くさま物すごし。又た寂しくも哀れにもみゆ。

『いかなれば此句は斯く迄に吾が想ひを動かすことぞ「おん僧。酒は年經たる匈牙利酒なり」あゝたゞ此の句。さても氣の毒なるはエ、ソヒなる哉。恐ろしきは浮世の波にぞある』

立て障子開き、欄干に倚りてひたすらに暮れゆく寂しき風物に眺め入りぬ。遙かに聳ものは元越山なり。元越山の彼方は太平洋に連なる日向灘なり。木立山右にあり。灘山左に横はる。所々にデルタをつくりつゝ流れゆく番匠川。雨をふくめる漁村の柳も文人の造句にあらず。絲の如く降りそゝぐ雨に、薄青き煙をこめて、重く小市街の上を覆ふものは何ぞ。夕暮の影か。哀思寂寞の翼か。そも亦た情話と安眠とを和らぐに春の雨の魂かなど思ひつゝく。

『さても浮世の波の恐ろしさよ』吾が想ひは再びエ、クヒの身の上の如何にも哀れなる物語のうちに入りぬ。筋太き手を折り〱獵刀のつかにかくる癖ある二十三才の若もの。其の黒き瞳の稻妻のやうなる光。「朝あまり早く出さぬやうにひかふる妻迎へんとはせずや」とセバルト和尙にいはれて顏赤めたる彼。若しくは屋根の上をわたる淋しき風の音を聞きながら。離れたる浮世の夢の幻を描きつゝある彼。さながら生けるが如くに吾が俤に立ちけり。

『さて哀れのものよ』吾はつぶやきぬ。而して込み上げ來る淚をのみぬ。

時に淸正公の信徒が打つ太鼓の音。雨にしめりて重く響き來り。名を知らぬ小鳥。門前の柳の頂に上りきて、雨と夕暮とを嬉れしげに聲を立てゝ囀り。一羽の。これも吾が知らぬ鳥。もつるゝ如くに並びて。上に下に飛びて山の端にかくれ去り。暫時して柳なる鳥も何れにか去り。太鼓の音のみぞ愈ゝ重げに響きける。市街寂々として人なきが如し。水田に鳴く蛙遠く又た近し。

忽ち思ひ起せるは古き友の身の上なり。忽ち思ひ出づるは阿蘇山の美くし煙なり。靜かに懷ひめぐらすは小兒の時の嬉れしかりし事、面白かりし事なり。或ははてしなき時のあとさき。或は限り知れたる人の身の命の跡。彼れより是れ。是れより彼れ。吾が思ひは始め終りなき環の如く。めぐり〱て夕暮の樂しくして哀しく、哀しくして樂しき心地を織り出し初めぬ。

計らず或る旅館の一室に出遇ひ。不思儀にも互に打解けて十年の友のごとく語り合ひたる人の。一夜を限りに西と東に別れて其のまゝ。互に音さたなくなりしとなど思ひ起したる時は。ひたすら人間の逢別遇離の怪しき緣と。はかなき命運など恐ろしく感じぬ。

大野太一。大野太一。あゝ此人今如何になりしか。此の

入今何處にぞ在る。

十一年の昔に別れて、其後絶へて一度び相見ざる少年同窓の友の事。突然わが哀想の環の一端にあらはれ來りぬ。

彼れ將た浮世の波に洗はれしか。

大島は彼れの故郷なり。此島は布哇出稼の盛なる地方なるを思へば。或は彼れサンドウヰッチ群島の一はしに他の同胞と團坐して故郷戀しき歌唄ひ居らずとも言ひ難し。

左る事もなかるべし。

然らば愈ゝうきよの波に浮沈して。今は淺ましき有様に悶きつゝあるか。

何ぞ知らん。甞て彼の優しかりし紅の頰は。今や日に燒けて薄黑く染まり。彼の丸く太りて柔かなりし手は。今や骨ぶし逞しき腕と變はり。家には二十才に足らぬ若き妻に夕餉の烟を藁屋の頂より吐かせて。それを谷の蔭より眺めつゝ。新月の光を草の露に踏み〳〵歸り來る村の評判者と生ひ立ちしやも。

『あゝ大野太一！』われは突然口のうちに呼びたり。更らに思ひつゞけぬ。

何故吾は彼の時。返書の端書なりとも出さゞりしか。

何故また此友のみが多くの小兒時代の友のうちにも。特別に思ひ出す事の志ば〳〵なるか。又た何故に。彼れを思ひ起す每に愛慕の念と懷舊の情とにみたさるゝか。嗚呼皇天！吾は人情を信ぜんことを欲す。吾と彼れとの淸くして愛深き交。あゝ少年の友情。吾は千萬年の歲月も。死の斧も。絶ち滅し能はざるを信ぜんと欲す。

斯くて吾が幻のうちに一個の愛らしき少年浮びぬ。顏にあふるゝ無邪氣なる微笑のうち。誠に優さしき友愛の情のあらはるゝと。昔ながらの彼の眞の俤なり。さて愈ゝ明白に此俤を捉へんと試むれば。十一年の記

臆は已に朧ろに霞みて。更らに確かなる畫線を與へず。徒らに捉へんとつとめて益々朧ろのうちに消へゆくのみなりき。却て吾が想像のうち。ふとすれば少年の彼。二十三才計りの屈强の若者とあらはれ。霜の如き月光のもと。鍬を擔ひて立ちけり。されど不思儀にも彼れの顔には無限の悲みを包み居たり。而して何處となく吾が想像せるエ、リヒと相似たる樣に思はれぬ。さなり、さなり。エ、リヒの幼時は太一の如くなりしならん。太一の如く美くしく、優しく親切に又たかしこく。

然らば大野太一の今の運命は又たエ、リヒの如くなるかも。あゝ浮世の波に洗はれしかも。

かく思ふ時。吾れ一首の古歌を思ひ起し。低き聲にてゆるやかに口ずさみけり。

せきとむる 柵 ぞなき涙川
いかに流るゝ浮身なるらん

二度三度此歌を操返して吟じぬ。をのれの聲の調の波にのせられて吾が心も更らに哀れ悲しくなりぬ。エ、リヒ大野太一の如く、大野太一吾の如く、吾亦たエ、リヒの如く。彼れを思ひてこれを思ひ吾を思ふては彼等を思ふ。而して又た此の歌を吟じけり。

頭を擧ぐれば。夜陰已に全く市街、山岳、田野、川流を包みて。雨のみぞ愈々降りそゝぎ。水田の水薄く光りぬ。耳をそばだゝて聽けば雨の音にまじりて老松おひ繁る馬場の彼方より。遠瀬の如き響かすかに聞へ。更らに耳を澄ませば何處よりか小兒の泣き聲聞へつ絕へつす。提燈の光一個闇のうちに現はれて小路を横ぎり忽ち又た闇のうちにかくれぬ。

『あゝ今日も愈々暮れたるか』

吾れは内に入り燈火をつけ机に向ひて靜かに紙をのべ。都なる友に書状認め、更らに父母のもとに一通を書き又た近來打ちたへて音づれなき友にも一通を認

ため。和歌など書きそへたり。
夜の十時を過ぐる半ば。かくして吾が土曜日は過ぎぬ。燈火をかすかにして床に入り暫時は雨の音と遠き松風の響きをきゝてありしが忽ち安き眠りに入りにける。
嗚呼安き眠りに入りにける。

さがおあの少年（下）

武田くら譯

巴　里

腹がへつてます、お通りがゝりの、旦那様方おたすけくださいまし。まあ御覽じませ、あれあの通り　雪はふりくる、地は氷りつく。さむうございます、ちぎればかりの　風はふきくる、日はくれかゝる。
まそれでも、わたしには　きるものもございません。
御邸にては御不足なく　なにからなにまで御心通り、それにわたしは御門の敷居に　ひざをついて泣いてをります。どうぞやつてくださいまし。小供の事ゆへすこして充分、
一文あればわたくしの　命をばつなぎます。
人がわたしにはなしていふに、巴里にゆかばかてをえやうと。こゝから遠きわれらの森で、多くのものがわたしにかたるに、とみたる人は苦痛のなかの、まづしきものをおたすけなさると。さてわたくしは御覽の通り、まづしいもので。おねがい申します。
どうぞ〱一日の　食丈をくださいまし。
御用ならばはしります、おつしやればはせつけます。このさむには口もふるへます、どうそねがひます。うたひましやうか、
もしわたくしのうたが、あなたさまのおきにいらば。

わがことをきゝいれず、あの方は逃げさつた。
あのものおとはおまつりだらう、あつちの方へはしつ
ていつた。
幸福なけうの日を　なほらくにおはるとて。
してまたわしはこゝに今夜をすごさむ爲にさがさに
やならぬ。
人のゐぬ番小屋を　どりやさがしにゆかうか。
いつになつたらわが家の膳にわたしはすはる事とな
らう。
貧乏なわがやどを　わたしにかへしてくれ、
晩の御飯にわけてくれるが、あのひからびたうしのか
んらくも、また夜となればわがのぞみをば、いくらか
のこさにや仕舞へぬ祈禱も。
あゝおつかさんおまへはいッたが、わたしがおまへの
うらをでるとき、旅にいつたら大きくなつて、そして
立派にかへつておいでと。したがやつぱりもとの小か
らだ、あゝどうしやう死にたくなつた、
おまへにはなにひとつもちかへるものなくて。
いや〳〵そうでない、わがとしで人は死なぬ。
なんだかとこかで勇氣をとれと、いはるゝ樣だがなに
だらうかしら、あゝどうしやう何を望まう、ついから
なつてなにをまたう。わたしは一疋まるもつとを、も
つてはゐたが餓えてしんだ。
あはれわらべは地面のうへに、頭やすめて横になりし
が、雪はふりつゝわらべのうへに、つもり〳〵て半ば
はおほふ。この時吹きくる風のあなたに、まつかな聲
のさゝやく如く、寒氣にふれてねむりしわらべを、呼
びさましたる樣子なり。

泣くものはすぐさまに、わがもとにきたるべし。
さわげる風にまぢれる聲の かくもかたりてなほもいひけり。
危難なるときこそは、われ〳〵の時なりけれ。
みなしごはこと〴〵く、われ〳〵の小供なれ。

かくてふたりの喪服の婦人、かれの不幸をすくひやりけり。おとなしくしてあはれな童、うれしさあまり氣も轉倒、聲におきたち先おどろきぬ。見れば婦人の指のあひだに、長き手づゝのさきにきらめく、銀の十字のみしるしあるに、二度も三度もおじぎをなして、わらべはあとにつきそひてゆく。

歸省

あの大なる頂上高く、あの永久な氷塊長く、
夏の日かゝりてかゞやくほどに、あるぷす山はげにうつくしき。すゞしき谷に、あるものはみな、人をたのしましむるにたり、青きくさきと、流るゝ水と、森また林、あたらしき花と、かゝる世界につくるときなく、すまふ人こそさいはひなれ。しばしはなれし旅よりかへり、二度見るものこそ幸なれ。

今この夏がこれらをおくるあの旅人は何者ならむ。谷の間遠くかれたゞひとり、手につえつきてたどりゆきけり。これわらべなり、彼の兒はすゝみて長き旅路にしたがひきたりぬ、
ふらんすを立ちいでゝ、さゔをあへとむかひて。
やがて小山のほそ道すぎて、けさ日曜の晴衣をつけて、
しろぬのゝふくろには、一杯みたして、ぱん粉をつめて。

もうほどなきになにとていそぐ？ あはれわらべは

小山によぢる。とゞまりはせじ、わが家を見ずば、かやの家根見かけずば。

あれ見よ平常見た通り、これこの大きなもりはやしも、木の葉にかくるゝ此川までも！わづか十日もはなれたりとも、思はさるらむあのわらわべは。

わらべはそのむらに　やうやくに近きぬ。

あゆみながらもたゞうれしさに、ながめてゐしがさてなにごとぞ、まつものとては誰ひとりなく、かやのわが家は閉ぢたりけり。されどとがれるやねのひまより、ほそきけむりののぼりたちけり。わらべは心も氣もいらだてゝ、おつかさんあけてとたゞさけびぬ。母はかまどのそばにはあれど、長い間のくるしきやまひ、なかばからだをやうやくおこし、手をさしのべてとゑをばあけて、

かへつたのは、坊ちやないか。

うでにすがつて子は泣くばかり、我身は不隨と母はいひぬ。神はわたしをくるしめたまふ。四五日まへから心のうちで、わたしはそなたに志らしておいた、も一度そなたを見る事なくてなんでわたしが死なれませう。その時わらべはなぐさめながら、おまへの子にはわかれたおまへ、だが見ておくれこれこの通り、さ滿足な日をおくりませうよ、わたしも大きくなりましたゆへ、おまへのみとりはよういたします。

これからはながいあひだ、こまらずにくらせます。

そして母親と手をにぎれば、もちたるものは膝よりおちぬ、財布にかくせし三ひらの金も、母の爲とてもてきしばんも。

母はいただきて息をばついて、うるむ眼に、まへにかけ

たる
くすぶりしかしの木の十字架にそゝぎけり。
主なりけり、われはしれり、あはれな母と小さきわらへの、神はわが身に心をおけり、主なりけり、われをなぐさめしは、わが心配にくるしみしとき、
いとどほき旅路なる　わが子をばおもひおこして。
母たるものがいのるべきものは、われらの子をば凍餓にすくふ、をのがいへなるくりすとぞかし。われらは羊を守るほどに、狼はきて之をくらふに、わが子わらべはたゞひとりにて、たびだちしかども無事にかへりぬ。
今はたよりはそなたばかりぞ、かたはな母はたすけが入用、そなたがなくては死んでしまふに。わらべはこの路にかなしさあまり、手をくみあはせ膝にたほれ、
神様よわが母を長生せしめ玉へ。

家政

學藝片々

金剛石の製造

十九世紀の文明は、何處迄高飛して、造化の巧妙をあばくか殆ど豫定し難たきものあり。近か頃金剛石を製造して好結果を得し人あり。こは佛國の理學者にして、名をモイサンと云へり、その製し方は、瑪瑙の一種なる紅寶石を、適當なる温度の火力を用ひて燒くに、透明にして光澤あると一見して、金剛石の如きものを得之れを顯微鏡に照らすに、全く純砕の金剛石に異なる處なし。然かれども惜しむらくは、量非常に小さくなりて。未だ滿足を得る能はざるにより。氏は更らに新たらしき一法を試みたり。

その法は華氏五千四百度と云ふ非常の高温度を用て、鐵と炭素とを化合せしむるにあり。之れにて得たるものは、黒色の金剛石と、極少量なる白き結晶物なり。その結晶物こそ、白き金剛石と同一の物なりき。氏は未だその量の少なきを以て、滿足せず、尚ほ種々と試驗中なるが兎も角も自然の金剛石が、貳萬年の昔にありて、如何にして出來しやを推理するの一助となすに足るべし。

その昔し、如何なる石のありしやは、判然せざれ共、その石と、炭素とが、非常の熱によりて、化合し、俄かに冷却せしによりて、金剛石の出來しや疑がひなし、學問の増々進むに隨たがひ、増々造化の秘密をあばくは如何に面白きよ。

料理法

ケヤベーヂの晒し法

初めケヤベーヂの何物たるを知らざりしもの、近か頃は追ひ〳〵その調理を好むに至り、市中の八百屋にも多く、見受くるに至たれり。されど料理の法宜しきを得ざる時は、猛けしき臭ほひを發するため、嗜好に適せざるとあり。

佛蘭西にては如何なる時にも、ケヤベーヂは必らず之を晒らさずしては、用ひざるよし。晒らす時は強よき臭を去りしかも眞の味は、少しも損せざるが故に、何の料理に用ゆるも味殊に美はし。

晒らすの法は、ケヤベーヂの外部の青き葉を去り、白き玉を竪てに四ッに切り、幹の固たき所をくり抜き、沸騰せる湯の中にて、十分間湯出、然る後すくひ上げて、暫時冷水の中につけをくなり。冷水の中に、全く冷ゆる迄つけをく時は、葉も柔らくなり、臭も去りて、何の料理に用ゆるも美しき味となる。

若きケヤベーヂ

若かきケヤベーヂの晒らしたるものを取り、能く水をきりて、細まかく彫ざみをき、別に燒き鍋の中に大さじ一ぱい計のバタとかし、その中へうどん粉一さじ計り入れて、能くかき廻し、その上より鹽と胡椒と茶碗一ぱい計りの牛乳と、好みによりてクリームをも入れ、沸へ上りたる所へ、先のきざみたるケヤベーヂを入れて、能く攪き廻し、堅く蓋をなして十五分か廿分位ひ煮るべし。それより出だし見るに、水氣未だ多き時は、未だ全く出來しものにあらざれば、汁の殆ど、無くなる迄攪き廻しつゝ火上に置くべし。

　ケヤベーヂの丸煮

熟練したる手にて丸煮を料理する時は、恐らくは之れに勝りたる美しきものはあるまじと思はれる。その法はケヤベーヂの青き外葉を取り去り、眞二つに竪てに切り、中をくり拔き、くづれざる樣に注意しつゝ、十分計り湯出然る後冷水に暫時冷やして、臭ひを拔き、さて引き上げて水をたらし、もはや充分と見し所にて、牛肉をたゝき中心のくり拔きたる處に入れ、二つに合せ、上より糸にてぐる〳〵と捲き、中の出でざる樣にし、さて別に鍋の中に牛肉の切れを一並らべしき、その中に葱を細まかく刻ざみたるものと、蕪の刻ざみたるものとを入れ、その上より牛肉のスープをかけ、鹽と砂糖とを混和しその中へ先きのケヤベーヂのくゝりたるをそつと入れて、上より蓋を爲し、一時間計りとろ火にて煮る時は、中にある牛肉の味と、外のスープと相和し、ケヤベーヂ全躰殆ど牛肉の塊りかと疑ふ計りに、味ひ付き、淡泊にして甘きもの之に過ぐるものはあらざるべし。この料理は、暑中よりも返て、秋風の此の頃の嗜好に適せり。

　ケヤベーヂの酢いり法

若かき柔らかきケヤベーヂを、前法に隨つて晒らし、小さく刻ざみて、布につゝみて、水氣を能くしぼり去

り、さて鍋の中にベタか牛脂かをとかせしもの丶中にて、暫時いり付け、水氣の全く去りたる時に、酢と砂糖と、志ほと、胡椒を入れて、暫時煮るべし。

家の色取

家の明かるきと、暗らきと、美わしきと、醜にくきは、其の內部の色取の如何にかゝわること多し、例とへば黒ろき壁、黒き卓子、黒き障子紙等を多く用ちゆる部屋は、薄黒くなり、白きものを用ゆる時は、明かるくなるが如し。然れども白はよごれ安すく、且つ餘り殺風景なる色なれば、家の飾りとしては他の溥すき變り色こそよけれ。

色取の美わしきを見わくるは、一種の美術にして、又た一種の能力なり。或る人は色盲とて色の見へ解かざる人あり。その人に赤かきものを見すれば、赤かきとを解するとは、他人と同じとなれども、桃色薄藤等を見するに、矢張赤かく見へて、更らに區別なし。故に我れ等が水淺黄と、桃色と、薄藤と、黄とを並べて、美つくしき淡泊なる色がなと稱美する間、彼は同じ様なるつまらぬ色を並らべしものかなと嘲ふに過ぎず。空の變りたる色貝の摸樣、鳥の羽毛の紅彩あるもの、吳服屋の店の變化あるもの、一も彼に慰みを與へず。美術家は云へり黒きが如き赤味ある即ち緋色と綠色とは風景にせよ、物品にせよ、世界の內にて最もいまいましき色取なりと。而して大低の色盲はその二色は、見へ得るもの多し。故に我等が世界を見て、地球を見て、美わしく作りあるよと嘆美する味は、遂に彼れ等には解せざるなり。

我等は色盲にあらざれども、智慧の足らざるより、考への屆かざるより、物に不注意なるよりして、折角財を費して、飾らんとせる家を、全く見にくゝなし終る

とあり。かまわざる人はよけれども、かまひて出來そこなひし時程、氣の毒なるはなし。更らば北向きの暗き室には、黄に青ばみがゝりたる、壁紙などを多く用ちひ、白壁の多くして、目のまばゆき室には濃ゆき飾りを須ゆる等、調合の仕方、第一なり。之れを爲し得るに至たらんには、自然の色取は如何に能く出來たるかを深かく味へば、大に能力を助け得らるべし。無やみに金錢を費やして、高價なる飾装品を求めたりとて決して美わしくはならざるべければ、智慧と注意とを以て取り合せる注意すべきなり。

西洋物質文明の一斑

西洋の懷爐

日本の懷爐は、通常懷に入るゝに便なるために、平らたく作れども、西洋にては、御者か、巡査か、馬丁が、ポッケットの中に入れて用ちゆるか、もしくは、貴女が手温の中に入れて、用ゆるが故に置くに便にせり。周圍は針金を網みて作くり、上下は厚き鑛屑の板にて張り、中に炭を入るゝなり。こは又た歯痛、耳痛、リウマチス等を温むるに用ゆるが、價は一個一錢位にして、人々は通常はんかちふ、もしくは皮足袋の柔らかきものを以て外部を包みて使用すと云ふ。

空中の城

次回の世界大博覧會は、荷蘭なるアントワルプと云ふ所にて開會の筈なるが、その會場にて一つの目ざましき事を爲して、人々の足を引かんと目下計畫中のよし。その計畫と云ふは、五百哩以下二百哩以上の空中に城を設くるにあり。仕掛けは、四個の非常に大なる風船に、各々錨を付けて繋なぎ合わせ、更らに三十六個の小風船を隅々に繋なぎ付け、大なる風船には、奇形なる城の形ちを爲せる籠を結すび付くるにあり。籠

は竹、若しくは鋼鐵の中空の棒を作りてあみ合せたるものにして、中には舵取りの機械も備へありて、一時に十四五人を載せて、六秒間にして二三百里の中空に登るを得ると云ふ。風の強弱によりて高く登る時と登り得ざる時とあり。

頭髪を洗ふの時期

追ひ〳〵寒くなるに隨がひ、人は漸やく無性がちとなる中にも、婦人の頭髪を洗ふは、寒むくもあり、冷めたくもありて、延ばし勝ちとなる。然るに一方には、火に近かづくとだん〳〵に繁げくなるが故に、逆ぼせて、頭垢も澤山出來、又た障子を閉づること多きが故に、空氣の加減もあり、旁々頭痛の多きは通常なれども、頭痛を免がれんと欲せば法なきにあらず。即ち未だ寒からざる今頃より度々頭髪を洗ひ、且つ髮に付きて注意を爲す時は大に頭痛を減ずるを得べし。

頭髪の搆結

頭髪の注意を述ぶるに先きだちて、頭髪の搆造を知るをは必要なり。頭髪は、一本毎にその根に神系と血液の袋とありて、毛髪は各々それより營養を取りつゝ成長す。その根の兩側に、二個の油袋ありて、常に髮をうるをはしめて、光澤を生ぜしめ、且つは根元に、塵の集まるを防せぐに供す。かくて髮の中は、空なる管の如くなりあるが故に、人の躰が通常にてある盡ぎりは、その中に髮の食物が上下しつゝ、髮を養しなへり。一旦病にかゝる時は、髮は養ひを受くるを得ざるにより、抜け落つるの結果を見る。元より何病に盡ぎらず、病氣は必ず髮を抜け落さしむるとは、云ひ難けれども、髮の落つるは、何か身躰に異變ありし證なれば輕々しく見捨つるべからず。

髮の落つると

髪は如何なれば落つるやと云ふに、通常の原因は濕ほひを失しなふが故に、もろくなりて裂け落つるなり。故に髪の脱落を防せぐの法二様あり。一は能き食物を食して、充分の營養を身躰に取り、隨つて頭髪に及ぼすにあり。次ぎは充分の睡眠を爲して、精神を休むるにあり。元とより日本の髷の如く、堅く根本を志ばり或は外部より多分の油を付けて、ために身躰より發する油を妨ぐるが如きは甚だしき害なることにして、眞の美しく、光澤ありて、多く且つ長き房さ〳〵しき美髪を得んと欲し又た頭痛に苦しむ入は、下に記るせる如き、適當なる財料を以て、時々髪を洗らひ、且つ暫ば〳〵ブラシにて磨するべし。ブラシにて屢々磨するには束髪にて便利なれ、且つ束髪は天然の脂肪の出づるを促がすに益あり。又た度々髪をとかすは血液の巡環を好くして髪を長がく延ばしむるを得たり、美髪を造り方々養生となりて兩つながら益あり。日本風の結髪にても、櫛まきもしくはひつこきの如き簡易にして、元結の多くかゝらざるものは、束髪と大差なかるべし。

髪を洗ふには、灰汁もしくはソーダの多き石鹸等は不可なり。出來得べくば、温るき湯にて、堅き白き石鹸を溶解せしめ、その中に一サジ計りのアルコールと、少量の香水を混じて洗料に用ゆべし。

元とより出來得べくば、自然の脂肪の出づるを促なかすために、入造の脂は着けざる方よけれども、餘りにばら〳〵してうるさき時は、左の製法に隨がつて束髪油を作り用ゆるも可なり。

束　髪　油　の　材　料

蓖麻油四オンス、アルコール二オンス、及び好みの次第の香水を以て作りたる油は、頭のためによし。又た石灰水二オンスに、橄欖油六オンスを加へたるものも、頭のためによし。何れを用ゆるも、使用の際に當り

て能く攪き廻すこと必要なり。

ふけの原因

ふけは必ずしも不潔もしくは逆ぼせのみより出づるものにあらず、堅き櫛の歯を以て甚だしく頂をかくが如き或は、髪をひどく縛ばるが如きは、頭皮に刺戟を與ふるが故に、ふけの原因となる、ふけの多きに困る人々は通じの好き食物を食するか、もしくは少しく輕瀉せしむるために、輕瀉劑を服して、常に通しを好くし柔らかきぶらしにて櫛けづり、上に記したる如き油を用ひ、且つ、頭を冷やし加減になしをかは、その憂を免ぬかるべし。

頭の焮衝

頭の全躰、もしくは一部に田虫の如きもの出來て掻くに由り焮衝を起こして、血ばしりたる時には、左の薬を用ゆれば、直ちに醫すべしと云ふ。大サジ一ぱいの家の油に、大サジ四分の一の松脂を混じたる膏薬を作り、毎夜床に付く前に塗り付けて休すむべし、朝に至れば臭い自然に去るべし。

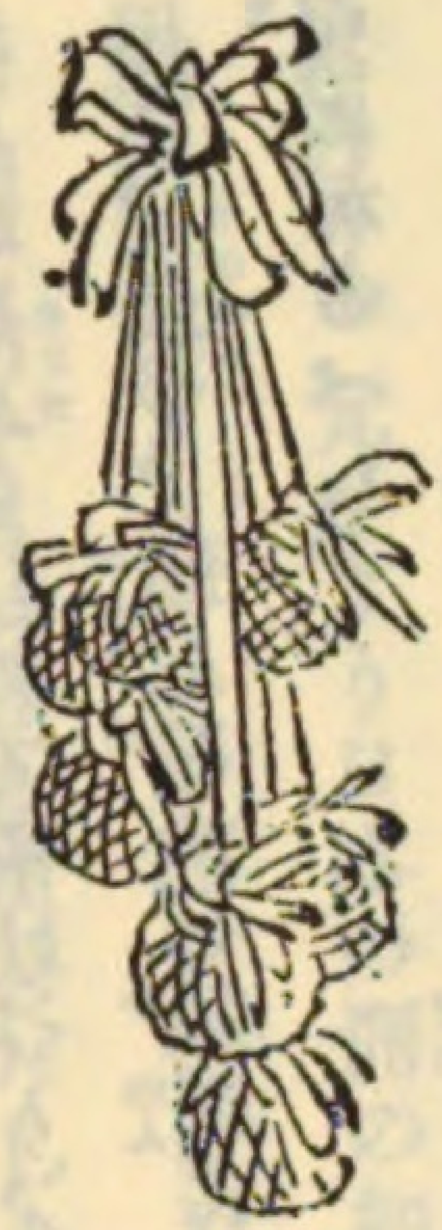
白毛を抜くの害に付て

五十の老媼が、廿たちの令嬢と容顔を爭らそはんとして、白毛を抜くは愚かしきかぎりなり。そは半白の髮の根元の黒ろきものは、必ず根元より切るべし。さすれば、その髮を養なはんとして登ぼり來る處の營養物は、その先きの切られたりとも知らずして、進み行き斷たれたる所に至りて、もはや進行の路なき故、固たまりて腐敗して、隣りの髮と接ぎ合ひて、新らたに又た白毛を生ずべし。白き毛は、頭の冠なれば、決して耻づべきものにあらずして、少しも抜くの必要あらず。老人が若かきものに勝りて價値あるはそれがためなれば也。

手藝案内

懸針指（ハンチング、ピンホールス）

「ピン」は家庭の中にて最も能く働き、我々の身躰を保護する衣服を仕立つるには是非共此者の力を假らざる



べからず、されば「ピン」は實に家庭に於ける一個の忠義者なり、さりけれども之を等閑に放置するに於ては甚しき危險あり、疊などに落し置きて人の足部を傷け、最も甚しきは胸を貫きて遂に死に至らしめたる事實あり、これは忠義なる「ピン」をして惡用せしめし罪にして、決して「ピン」其者の罪にあらず、家庭雑誌廿七號にも記載しありしが如く、英國の諺に「ピン」は金なりと言るが如く、「ピン」及「ピン」の効用を尊重すると共に、之を能く保存して危險ならしむるべからず、これには針指第一の品なり、我國の針指は毛の丸めて木片の端につけ、或は針箱に入れ赤色の絹切、又は木綿切にて之を蔽ひ針を刺し置けども、小兒等來りて針を弄し往々傷を受くる事あり、西洋人の家庭は最も能く針の保存に注意し、種々なる針指を製し置けるが其中に美麗にして實用ともなるべきものを記すべし。

圖に示せるは懸針指にて我國の如く疊の上に置かず、壁の如き所に懸くるものなり、之を製するには通常林檎色の青絹切八片を取り、別に毛を丸めて適宜の大となして八筋各長短ある「リボン」を心と爲し其上を右の青絹切を蔽ひ八個各々白色の「リボン」(絹紐)にて其首を括り、斯の如くする時は圖の如き八個の「ピン、ポール」を得ることと圖に示したるが如し、之を其上にて一所に纏めて壁の釘などに容易に懸け得らるゝやうにすべし、これは外觀の美麗なるのみならず、大に實用に適す、八個の「ピン、ボール」あれば、色々種類の異り

たる「ピン」を各々別々に此八個の針指に刺し置かば、大中小の針又はくけ針、絹針等を尋ぬるに便利なり、八個の色を違へて製せば隨分見事なるものを得べし、誰にても製作し得らるゝ簡易のものなり。

女頭巾の仕立方

追々寒氣に向へば女頭巾入用の時節に趣きぬ、但し女頭巾は十一月末方より弗々着用せらるゝが、今より裁縫し置きても必らずしも早計にあらざるべし、其仕立方を記せば縮緬（安價に仕立んとならば唐縮緬にても宜し）四尺を取り兩端より一尺五寸宛の所に小切を以て兩耳の引懸をくれば兩耳の間は一尺となる（素より耳と耳との間の廣狹により耳より額にかけ又耳へ下りて其間の寸を定め長短を見計べし）其一尺の間には裏地をつくべし、裏地は決して甲斐絹又は縮緬の如き上等品は却つて頭髮の油の移り易く甚だ不經濟の至りなれば、表の縮緬は如何に上等品を用ゆるとも、裏地は唐縮緬に限ると知るべし、唐縮緬は油をはぢくの効あり一尺二三寸巾もあれば充分なり。

當世の流行は如何なるものかと云ふに本號流行案内にも記載しあるが如く、上等に製せんとならば濱縮緬に過ぐる事なし、色合は年增の人にて鐵色、藍鼠、淡鼠、淺黃鼠を可とし、年齡若き人ならば藤色、紅掛、櫻鼠等第一等なり、裏地は成るべく共色を可とす、且つ又充分の好みを以て製せんとならば、布帛の端に雪又は月又は花の摸樣を染め拔き、其中に自家の紋を置くか自分の名前（これは一種の婦人に限れども）を書き入れさせ置かば、頭巾の紛失又は取違を防ぐべし、頭巾は同じやうの形又同じ色多ければ集會の席などにて一所に混雜し、歸宅の時取急ぎの際に彼我のものを取違ふことあり、又斯樣に染め拔かずとも糸にて何か印點を縫ひ置きても宜しけれども、糸縫にしたるは野暮の風と知るべし、而して右の如くして呉服屋に注文せば、

縮緬、裏地、染代、耳紐等悉皆にて二圓以上二圓五六十錢にて購ひ得れども、切地を求め自家にて製作せんとならば流縮緬一尺四十錢以上のものを撰み四尺を以てせば一枚のお高祖頭巾を製し得らるゝなり、但し毎年一冬を過さば必らず裏地等は洗ひ張して油氣を去るを要す、さすれば長く保ち得らるゝなり。

冬　襦　袢

追々秋冷深く相成たれば汗はぢきの夏襦袢も最早肌に快よからず、これよりは冬襦袢の候となれるが、何を用ゐて可なるや、茲には「ボタン」附きの襯衣なる舶來品を除き、我國在來の襦袢の事を記さん。

婦人用の襦袢の裁縫は本紙第二十六號(三月廿五日)の紙上に記載したれば茲には記さず、男子物を案內すれば、本「フランチル」を以て袖胴共に製せんと欲せば大巾二「ヤード」と一尺(本邦尺七尺許)を要す、則ち胴の身ごろを四尺にとり、兩袖を殘り三尺にて製せば身丈二尺袖丈一尺四寸五分を得べし、又今少し簡略に製せんとならば身丈を一尺五寸位袖丈を一尺二三寸にしても、下に着るものなれば見苦しからず、襟は大巾より身ごろを取りたる殘り三寸五分もとり、片ゆきは袖の餘りにて出すやうにすべし、掛襟は黑八丈(五日市)か黑七子を撰み、廉價なるを好まば毛繻子なり、右は胴と袖共切なれども、胴を「フランチル」にして兩袖は濱縮緬を用ゆるは一般の流行なり、縮緬は薄地なれば、其裏地に上等ならば緞子下等ならば甲斐絹を用ゐ或は花色絹を取合はするも宜し、右の如くすれば總「フランチル」の算用を擧ぐれば一「ヤード」六十錢即はち二「ヤード」一尺にて一圓三四十錢之に黑八丈の掛襟十五六錢より三十錢とすれば一圓五六十錢を以て一枚の襦袢を製し得べし、若し本縮緬を袖とすれば二圓以上に上り其上袖裏を合はすれば價限りなし。

若し綿「チル」にて製せんとならば大巾一尺七錢(最上

等）のもの七尺（胴袖共）則ち五十錢、之に黒八丈か毛繻子を合はせば可なり（其價は前に記したり）繻絆は外見よりも温暖を取るを主とすれば綿「ネル」は表の毛のある方を肌につくるやうに仕立てなば暖きこと勿論なり、近來は綿「ネル」も織方頗る精巧に趣きたればなか〳〵馬鹿に出來ず、大巾一尺七錢位のものならば申分なし、繻絆は身につけ隨分汚穢し易きものなれば、白色か又は淡色を撰び、屢々洗濯するやうにすべし。

扨縫方は「ネル」は大巾ものなれば脊縫を爲すに及ばず襟肩の明は二寸とし腋筋を縫ひ（裾の方にて二寸五六分より三寸位を明く）それより袖をつけ、最後に裾は裁放しにしては躰裁宜しからざるのみならず、保持の上にも損の行く事なれば、細かに三つに折りて縫ひ留むべし。

毛糸の胴衣

毛糸を以て小兒の胴衣を製せんとならば、象牙針十四番を用ゐ目數百〇三を作り、毛糸四オンスを要す、但し糸の色は其人々の好きに任せて可なるも小兒物なれば派手にして美麗なるものを用ゆるがよし。

先づ一段二つ編み、之を一緒に二ッ編み三ッ平に編み糸を進め一つ編み、又糸を進め三ッ編み一緒に二ッ編み之を反復し列の終るまで編み行きて最終の二つを殘すに至れば各格形に於て十一個の目數となる。

二段はあらく一段編む、三段は丁度一段の如くすべし。

四段は二段の如くあみて、十二個の目數が出來るまで編み脇を作り終るまで二つを編み、二つあらく編み行き、能き程を見計ひて進行を止む（但し八十が適當の數）斯の如くして胴衣の半分を製し得らるゝなり



筒袖は始め目數七十七を作り、又た補編を十四都合九十一を作り兩側平編を爲すべし、十四を編みて

糸を進め、三つ編み一緒に二つあみ、又た一緒に二つあみ、三つ編み糸を進め一つ編み糸を進め三つ一緒に二つあみ、而して之を七つの目の出來るまで補編の外まり互の糸を編むが宜し。

胴の下には籐編の如きものを以て袴の如く下になるほど目數を擴げて編むべし

新　染　術　(續)

藍色――絹五百匁毎に先づ銅器に水を滿たし、文火にて華氏の寒暖計百度を與へ、硝酸鐵七合五勺を灑ぎ入れ善く攪ぜ置き更に別器に結晶錫(結晶錫の製法は鹽酸三合水一合の割合にて石燒の壺に入れ、華氏寒暖計二百度の熱度に至らしめ、錫を薄く削りて小片とし少し宛徐々數十度に投入して之を溶解せしむべし、壺中の酸氣漸く淡く鎔力の全く絕ゆるに及びて、徐々に壺中の温氣を去り壺中の白色凝結物を取り出し別壺に移し、其口に拴を爲し使用に供す)七十五匁を投じ熱湯にて能く之を溶解し、以前の汁中に混和すべし、而して此汁中に染品を入れ浸し其色の薄茶に變ずるを以て度とし、汁中より染品を取出し清水を以て手柔に洗ひ出し別器に細末の黃色血滷鹽七十五匁を投入し、其中に少許の熱湯をそゝぎ入れて悉く溶解するに至り更に銅錫に水を浸し、華氏寒暖計百二十度に至らしめ、此湯の中に硫酸或は鹽酸三十匁を注ぎ入れ、又之に以前の黃色血滷鹽の溶液を混合して後に此液中に右の染品を浸し入れ十五分時にして取り出し清水にて能く洗滌し、再び硝酸鐵の液汁に浸すこと暫時にして取り出し尙又清水を以て洗濯すること兩回にして別器に水を滿たし明礬百匁を溶解し、染品を浸し入れて色留を爲し暫時にして取り出し暖室にて乾せば藍色染を得らるゝなり。

社交一斑

流行の栞

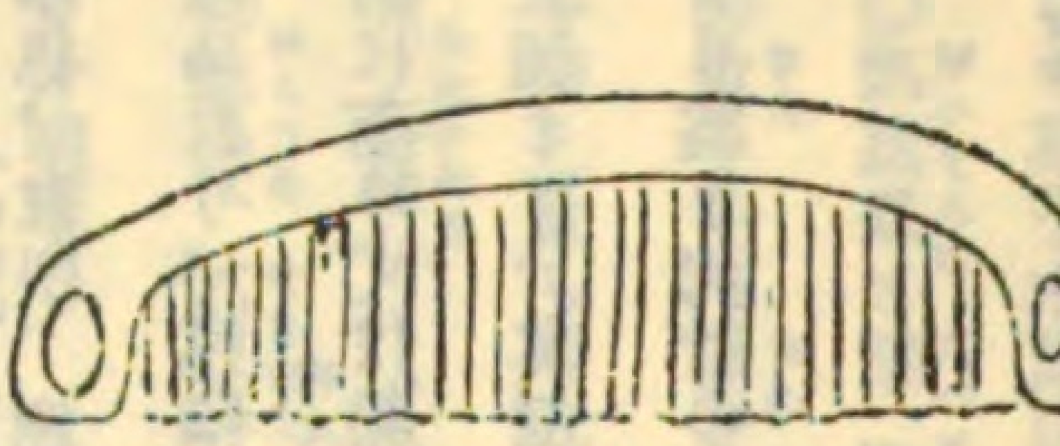
春夢

目下の流行品社會

毎年目下の時節は流行品社會は最も繁忙を極むれども、本年は甚だ寂寥の感あり、毎年の例を以てすれば流行品の世間に顯はるゝは殆ど筆記に遑あらざる程なれども、本年は日清事件の影響を受け、市中一般不景氣なるが故に、假令新奇なる流行品を出しても萬一賣らざることを懸念して各々控への有樣なるが、實際は世間で不景氣〳〵と唱ふる程にはあらず、不景氣の原因は日清戰爭にありと言へども、正金が澤山外國に出でたるといふ譯にもあらず、物價が幾分か高直に趣きたれども、是迄甚したることにもあらず、物價の標準たる米價一石八圓臺の相場なれば其他は之に準じて知るべし、必竟世の不景氣〳〵といふは半ば神經病にして決して眞正の難症にあらず、唯商賈社會に昨年より二三割減少せるは、商店に於て思ひ切りて仕入を爲さゞると需用者が戰爭を遠慮して贅澤品を買ふを控ゆるに歸因せずんばあらず、然れども贅澤品を買ふを遠慮するは能き心懸なると同時に、商賈人も面白き實用品を製出して世の需用者に便利を與ふるも能き心懸なり、兎に角目下は一般の流行品は稍寂寥の觀あり、流行品の盛なるは日清戰爭に關するもののみ（別項に示すが如し）大抵安物なれども遠からず日本が清廷をして城下の盟を爲さしむる日を待ちて千萬年の後世まで紀念たるべき新品を出さんと各商家は各手ぐすれして考案中なりと聞く

鉈豆形の鬢櫛

近來一部の社會に流行するを見受くる象牙製鉈豆形の鬢櫛なり其形は圖に示めさるゝが如く櫛の兩端に間隙あり、木地の象牙のまゝにて修飾を用ゐず、頗るあつさりとしたるものなり、價は一圓内外のものと聞く、此外に藤豆形あれども鉈豆形の方が趣向面白し



流行の帶

男帶　筑前博多又は八王子博多の紋織にして則ち博多繻珍と稱する浮模樣を第一の流行とし次は片側鐵色にして片側紋織なるを締むるもの多し、次は鐵色或は紺無地の片側に微塵類の細き縞柄にして之は商

入向に適ひお納戸獻上若しくは鐚鈷の如きは羽織なしの袷着に締めて雪駄ちやら〳〵の通人向に持つてこいなり他は西陣の繻紾にして是亦相變らず奇趣を銜ふ華族若くば銀行社員に行はれたり、次に廉價なるものは八王子産の節糸なれども是れは織出勁くして一般に行はれず、故に博多を除くの外は夫の小倉にして近時織方大に進歩し殆ど木場博多と大差なきまでに至れり、柄は鐵色の片側に白茶地の薩摩筋又は紋織にして丈夫なるは東京近在製出の緞無地なり。

女帶　言ふまでもなく丸帶は繻紾織にして色は年齡によりて差あるも大體白茶地、肉色等最も流行し、藍鼠、皮鐵、之に亞ぎ黑の共模樣に至りては地味を好む人に最も適ふ、其柄は樣々なるも紅葉、菊を以て六七分を占め、他は松竹梅、千羽鶴の如き目出度もの又は牡丹、蔦葛等の草花模樣を好むと知り玉へ、次は腹合帶、片側は言ふまでもなく黑繻子にして此地質を評に言へば西陣の本繻子、上州の小柳繻子、唐繻子なるが此中唐繻子は日清事件以來日一日に販路を縮めたる傾向を生じ、今は小柳繻子が第一の[illegible]分にして博多は繻多織最も能く需用者の意を迎へ縞物は餘り行はれざる模樣なり、次に引懸帶に至りては織姬繻子或は小柳繻子に更紗縮緬或は八端織の珍柄を合するも面白し、次は黑の綿繻子、綿繻紾を合はし又は寒光繻子に更紗の唐縮緬を合はせば不斷帶に適當す。

半　襟

第一は例の縮緬にして次は繻紾次は水波琥珀次は絹天さす、さて目下の季節には九分迄は縮緬にして其色合は藍鼠、淡鼠、千歳、利久、壁鼠、藤色、紅掛、櫻鼠、肉色、白茶等最も行はれ夫の草色は全く其痕を收めたり、模樣は殆ど菊を以て大王の位地に推さるゝ如き觀あり、下等向に至りては綿天にして其色は海老、淺黄鼠、藤色、皮色、藍鼠の五種さす、其價は大抵十五錢前後價の廉なる割には大に見榮ありて當春より益々流行の域に進めり（勿論中等社會以下の需用）

頭　巾

季節は未だ早きに過ぐるも今聞き得たる儘案内せば地質は言ふまでもなく濱縮緬にして其色は鐵色、藍色、淡色、藤色、紅掛、櫻色、淺黄鼠の類最も多く而して其裏地は共色の唐縮緬に限るべく、且つ布帛の端に[illegible]て用ゆるやうになれり、勿論之は昨年よりの趨向なるか、今秋に至りて全然此に移りたりといふ、價は二圓以上二圓五六十錢、別に切地にて求めば濱縮は一尺四十錢よりありて四尺を以て一領のお高祖頭巾を製し得らるゝと知るへ

し。

日清戦争と流行品

日清戦争開始以來今日までに於て目に觸れたるもののみを擧ぐれば左の如し

◎支那分捕しやぼん＝其形は支那人の顔を顯はしたる奇なる品

◎大勝利羽織の裏地＝日本國旗を交叉し日本軍器、末廣等を描きたる更紗形

◎芝居＝これは茲に記さずとも讀者は先刻御承知の筈なり、川上一座を始め、新盛座、赤坂演伎座にも日清戦争の事を演し、近日より開場せし明治座の左團治一座も朝鮮軍記を開演中

◎幻燈、油繪＝但し此中には山師淨山の出なるが、淺草第六區の見世物の中日本軍人の服裝の粗末にして事實に相違ありとて其興行を差止めらる

◎菊細工＝團子坂を始め淺草花屋敷其他の菊細工ある花園にては日清戦争の人形を見せん爲め目下準備中

◎旭旗と玩具＝一は竹片の頭に方二三寸の旭旗、一は日清軍人が互に戦争決闘するブリキ製の玩具

◎勝利掛と川上掛＝勝利掛は菅糸を點圓にきりさばき白と紫とに染め分けたるもの、人形町具年屋より賣捌き、川上掛とは川上音二郎が「日清戦争」演劇中見物人に撒きたるより流行したる雁皮製なりと、孰れも安物

◎凱旋印、支那徽章、日の本＝孰れも菓子、其中凱旋印は「ビスケット」、支那徽章は砂糖菓子、日の本はからくりにて製し懐中汁粉にでもなる菓子木原店の梅園にて賣る

◎凱旋煮と乘取汁＝孰れも日本勝利を祝して思ひつきたる衛生料理

◎金ちやん飴と朝鮮飴＝孰れとも朝鮮と支那の奇怪の扮裝して船車を推し金ちやん〳〵と金時飴を賣り、一は朝鮮飴を賣れども、愛國家(御大層なれど)には賣れざる由

◎錦繪、石版畫、圖畫＝日清戦争に係る繪諸畫類の大流行いはずとも分明なり

◎軍歌賣＝從來船來パン米利堅パンと賣り歩きしものが高帽を戴き軍服をつけ喇叭を吹き鳴らし軍歌を賣り歩く

◎勝利櫛＝櫛の胸に日本の國旗を打ちちがへたるもの

◎めつちやめつちや節＝支那人めつちやめつちやの俚諺なり

◎遊三の茶番＝三遊亭遊三が支那人の茶番を爲し大當り

◎勳章向挿＝日本の勳章を房附にし拔挿自由なるもの、但し價は安し

◎士官形帽子と水夫形帽子＝これは先號に於て帽子の案內にも記したるが如く、今秋は日淸戰爭の影響にや略帽には鳥打廢せられて士官帽子又は水夫形帽子流行す

◎淸兵の的＝空氣銃を商賣さする店にては淸兵を的さしてイヨー當りなどといふ

◎凱旋＝日本橋區本石町靑松堂より新製の凱旋餅アトは追々發達して御一覽に供すべし

名響掛

これも日淸戰爭の連戰連勝の姿なるより各商店が何れも時機に投じて喝采を博せん爲め案出したるものは即ち名響掛さ云ふ根掛なりこれ金の旭旗を交叉して組打紐の中央に付けたるもの勝利簪は旭旗に我兵支那兵大砲其他種々の物あり何れも我軍の勝利の圖を作りたるものにして時節柄頗ぶる流行するさ

日用品物價

◎白米(一圓に付)　一等白米七升一合●二等白米七升三合●三等白米七升七合●四等白米八升三合●五等白米八升七合

◎雜穀　●本貫大麥二斗六升五合●脇場大麥二斗六升五合●肥後上小麥一斗九升五合●同麥安二斗●船橋小麥一斗九升五合●常州小麥二斗〇二合●下總小麥二斗●千葉小麥一斗九升七合●札入竹林麥一斗四升五合並一斗六升●上割麥一斗四升五合並一斗六升●佐野搗粟一斗二升五合●窒圓小豆一斗三升●中手小豆一斗四升五合●新川越本場金時九升八合●新庄內平豆一斗三升五合●銚子隱元一斗

◎鹽　赤穗三俵九分●大鹽并に八家四俵●本齋六俵●新齋六俵四分

◎砂糖　稀車三十六匁六分●同次一分●台安十八匁五分●同次十六匁五分●呂宗二十匁ゟ十八匁迄●並板糖十三匁五分●初雪三十一匁ゟ三十匁八分●天光三十匁ゟ二十八匁八分

雜錄

堂々たる競爭と卑劣なる嫉妬

無一生

伊太利の某有名なる畫學校にギドットーと呼べる少年ありけるが一朝彼の手に畫き成せる一幅の油畫は校中他に比類なく最も見事なる出來榮にてありけるにぞ教師等は大にギドットーを賞讃し衆口一致若しコノ生徒

にして今日の狀況にて進行かんには將來は吾が名を現はし父母の名を顯はすべき有名の畫家たるとを得べきぞと評し合へりしが茲に亦ギドットーと同窓の學友にブリュテローと今一人はロランソーと呼べる二人の生徒ありけるが彼等はギドットーが靈腕に成れる彼の油畫に對して大に其視る所ろを異にせりブリュテローと呼べるはギドットーより古參の在學者にして校中稍々評判を取りし生徒なるが彼の年少き畫家ギドットーの技の優れたるに嫉さ悔しさ遣らん方なく太甚く心を苦しめ吾が敵手が得たりける名譽は吾が名譽を不法に横奪せるに由れるものとなしギドットーが得たりける名譽を失墜せしめんとこそ熱心に希望せり。

同じ生徒中にてロランソーと云へるは露ばかりも斯る念慮を有せざりき彼は最も眞實なるギドットーの嘆賞家の一人となれり彼は他日ギドットーと同樣なる名聲を博せんとを熱心に希望せり彼はギドットーを吾が摸範となし而して彼の滿身の功名心はギドットーの進行ける道途を趁行くにわりき彼は熱心に進歩の道途に上れり彼は幾度となく畫きては直し直しては畫き不滿足の中に長き光陰を送りけるが彼は屈せず撓まず手を變へ品を換へ更らに倦怠の狀なかりしが彼は嘆息して曰く「嗚余は未だギドットーに及ばざると遠し」と然れども螢雪の苦學空しからずして彼は漸く成功の端緒に就くを自覺するの滿足を得るに至れり而して彼の手腕に成れる一幅の油畫に對して非常なる賞讃を博せしときに彼は謂らく「何故に余は他日余が嘆賞し余が愛するところの余の敵手に匹敵し能はざるべきか否々豈に匹敵し能はざるの理あらんや」と此方にては亦ギドットーは依然として成功を趁ひつゝありしが彼のブリュテローはギドットーを壓倒せんものと氣を焦燥ち居たりしが頓て彼はコノ競爭を打棄て嫉妬の惡戲と熱心に曉々敷法螺の批評を吹立てゝ自個を慰藉せり。

却說コノ畫學校の恒例として一年に一回某日に學校中の生徒手に成れる繪畫を一大室に陳列し而して最も畫道に明るき嗜好者の中より擧げられたる審査人等は彼等が最も優等と鑑定したる繪畫を出品せる生徒に對して賞與を行へり。

コノ大切なる日コノ大切なる場此に陳列せんがためギドットーは彼の平生の手並よりは一層立勝りたる油畫を共進會に陳列するの前宵に畫き上げゝるが殘れるは唯透明なるヴァーニッシを以て色揚げするのみのとにてありき。

平生ギドットーの技に優れたるを嫉ましき思へるブリユチローは時こそ來れりと片頰に笑を含み卑怯にもギドットーが使用せんとするヴァーニッシの入りてある小さき罎の中に腐蝕性の液躰數滴を注入し何喰はぬ顏して居たりけるが其目的とするところは油畫の鮮明と光澤とを全然破壞するの効力を奏しギドットーに鼻明かさせんとの下心とは知られけり斯るべしとは神ならぬ身のギドットーは明日のとの思はれて氣も欣々と勇立ち幾本かの蠟燭を點し夜の中にヴァニッシを施し畢りつ翌日日輪の未だ東天に上らざる前に豫て自個のために準備されたる場所に自個の油畫を掛けゝるが夫は偖置茲に亦彼のロランゾーは首尾や如何にと心臟の皷動高く自個の出品を定めの場所に陳列し最も意を用ひて其据付を畢りけるが自個の謙讓なるにも關らずヤハカギドットーの傑作に劣るべきかと心窃かに期し居たりき。

待ちに待たれたる開場の時刻は報ぜられぬ共進會の審査員等は續々として來り會し陳列場の扉は押開かれたり彼幕は刎ねられたり無數の繪畫は最麗かなる日光を享け燦然として光彩を放てり諸人は劈頭第一にギドットーの油畫の陳列しある邊に歩武を運びつ校中第一との評判あるギドットーが平生の伎倆を顯はせる繪畫

は是れぞ今日の見物ならんと諸人均しく仰ぎ覩るに何ぞ料らん諸人が期待せし傑作にはあらで臆氣にして班點ある惡畫を見んとは諸人均しく聲を放ち「ア、コノ油畫を校中第一の畫家の手に成れる繪畫と稱すべき歟」と時にギドットーは其場に來りけるが彼が一心罩めて畫き成したる得意の油畫の本來の形影は何處へやら見るも怖ろしき形影と變じ居れる樣子を目前に控へ惘然として望みを失ひ叫べる樣「余は賣られたり」と折柄傍らなるブリュチローはギドットーの痛苦を心地好きとに思ひ口の中にて舌を出しけるが是れとは反對にて彼のロランゾーはギドットーと痛苦を頒てり彼は叫び出だせり「亓は陰險の手段に出たる即ち亓は罪惡の然らしむるところなり亓はギドットーの所作にあらず余は彼の油畫を見たり彼の油畫は下繪が完全なりし如く彩色も完全にして毫も間然するところなかりしなり」と滿場の觀覽人はギドットーの不幸を憐むと雖ども斯る不躰裁の繪畫に對して賞與を行ふと能はざりき。

斯くて審査員等は逐一他の繪畫を審査しけるがロランゾーの繪畫然かも當時まで餘り名の知られざりしロランゾーの手に成れる繪畫に審査員等の選擇は止まりつ審査員等はロランゾーに賞品を授與するとなりけるがロランゾーは其を受取りてギドットーの傍に行き賞品を示して「ギドットー君コノ賞品を納めて呉れ玉へ君の優等を嫉んで彼樣に陰險手段を施して裏切りする者がなかつたら君の腕前だもの中原の鹿は確かに君の手に落ちたんだよ君の驥尾に附いて校中第二の地位を占むるとを得るのは僕の榮譽とするところなんで更らに遺憾はないが若し他日君に匹敵すへき地位を占むるとを得ば亓は堂々たる琢磨の賜にして決して卑劣なる瞞着手段に依るのではないのである」。

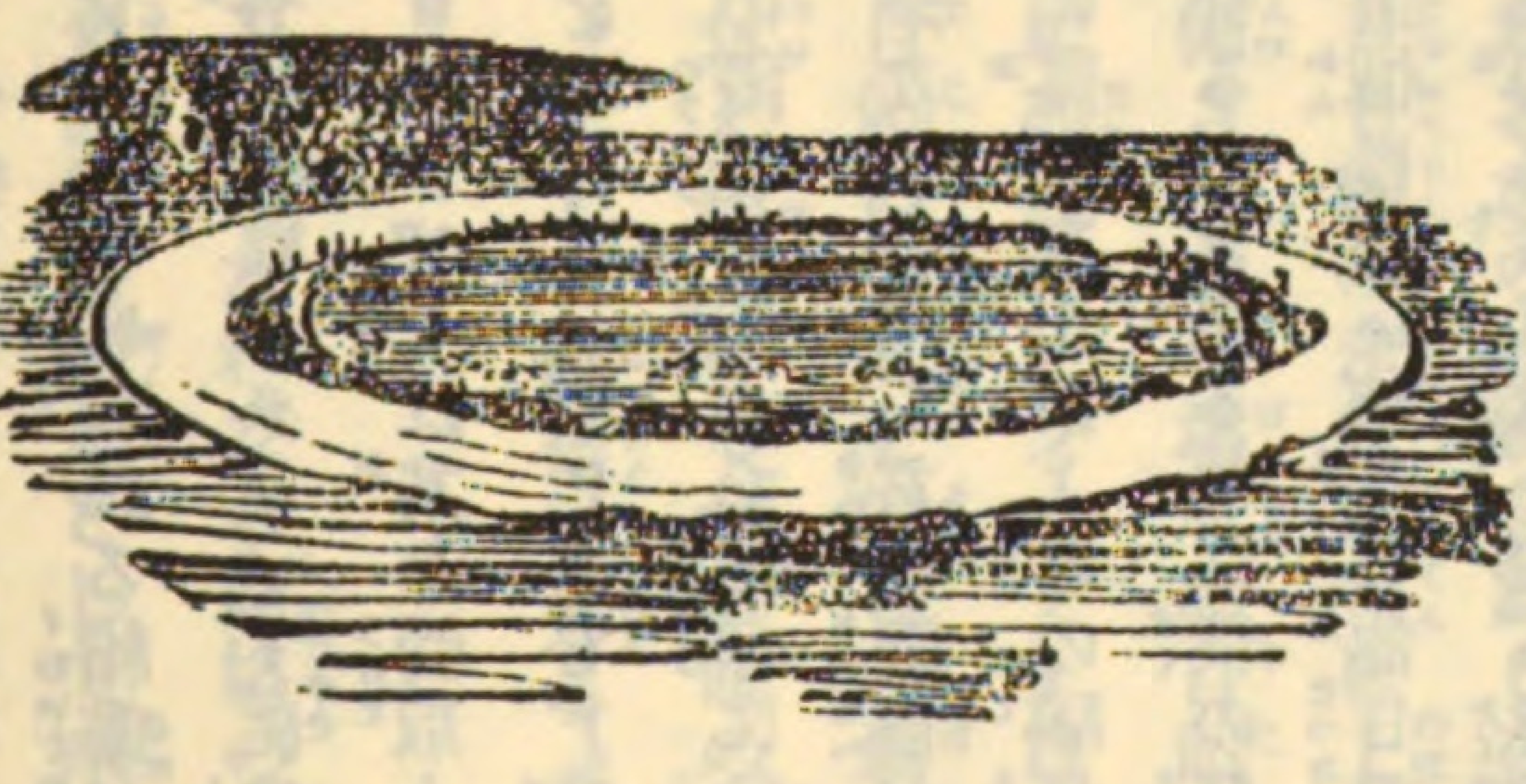
ロランゾーの義俠なる行爲は滿場の出席者を悦ばしめ

けるが審査員等はギドットーが辭退せるに關らず彼の少き敵手ロランソーが讓らんとする賞品を受領すべく亦夫れと同等の價値ある一の賞品をロランソーに附與するとなせり。

珊瑚礁

珊瑚の驚くべきものより成れること人皆之を知る。然れども珊瑚礁の更に驚くべきには如かざるなり。珊瑚礁は珊瑚虫の殼より成る。珊瑚虫は温さ攝氏二十度以上深さ百呎以内の滑らかなる海に生息し、石灰質の殼を分泌し、同一處に極めて多く群殖す。而して其死殼積て一種の岩土となるもの、則ち珊瑚礁なり。琉球諸島中にも珊瑚礁より發達したるものもあるよしなるが、其最も多くは南部太平洋にあり。其數二百九十餘に及ぶと云ふ。其最も長大なるは濠太利亞の東北岸に並行せる長さ凡そ三千百哩幅十哩より九十哩に至るもの是なり。

其形狀は種々ありて孰れも最も奇且異なり。陸地の周邊にありて之が緣を形つくるものあり。海水を包みて陸地を廻り、恰も塀の如くに形つくらるゝもあり。或は陸地に關係なくして洋中に生じ、中に海水を湛へ一種の環をなすものあり。



こゝに圖するは其環をなすものにして、稱して珊瑚環島と云ふ。其如何に奇且つ異なるかは請ふ圖に就て仔細に看取せよ。

征戰幻燈

其三　平壤の戰（上）

稚き我が兵士どもよ、牙山成歡の戰は已に之を告たる如し。これより約を履んで更に勇壯最も勇壯なる平壤といへる所に於ける戰を物語るべし。

牙山の戰了て大島少將義昌氏は京城外の龍山本營に凱旋し、直ちに北征の準備をさ〱怠りあらざりける。

清兵は成歡の一戰に打負けて牙山を沒落し、我兵を避けて廻り〱つゝ北て歸國の途に向ひしが、本國よりは援兵として陸路北の方義州街道より大兵を進め、遂に平壤に打入り、こゝに本據を定め、若干の兵を南に出したりき。

平壤は昔文祿の豐臣秀吉朝鮮陣の時先鋒小西攝津守行長が據守して、明の大將李如松と戰ひ、利あらずして退きたる處、京城は北の大都なり。

斯くて清兵次第に南下する模樣あるにより、大島少將は成るべく之れを南に誘ひ、橫擊して之を破る計策なりしも、清兵亦うかと南下せず。而して清兵の後詰として平壤に入込むもの極めて多く其數二萬にも及び、聲言して五萬と稱するよし聞えければ、我よりも野津第六師團（廣島）長中將道貫氏兵を率て渡韓し、立見少將尙文氏も同師團丸龜營の旅團長として之に屬し、更に第三名古屋師團の兵繼出し、其內豐橋分營の兵大佐佐藤正氏の統率下に先づ發し、尋で同師團兵の一部大迫少將に率ひられて元山より上陸し、平壤の側面より進擊すべく打立ちたり。

且つ山縣大將有朋伯は軍司令部長とし大川少將又治氏は同じく參謀長として渡韓し、桂第三師團長中將太郎氏も同じく出立したり。

軍を分て四方より平壌を圍むべく進みぬ。大島少將混成旅團を率て正面より向ひ、敵を牽制するの目的を以て進めり。立見少將は右の方朔寧といへる所の方面より向ひ、諸軍の統督野津中將は自ら中軍に將として鐵島といへる所の上流より大同江を押渡りて敵の左側面より進み、又元山津より攻寄せたる大迫少將の兵は平壌の東北面より佐藤大佐の枝隊と共に進撃し、淸兵を嚢の鼠の如くに引包みて攻め伐ちたり。若干の小戰の後、九月十五六日平壌を合圍して全く之を陥れぬ。

至誠の動かす所

（口絵の絵解き）

信州更科に丁吉といふものあり、不具のものにして或日無理なることゝも言ひつのりて、遂に其妻を離別しける。妻は心ばえやさしきものにて、丁吉が父の年老ひ且病身なるを氣遣い、丁吉の在らぬ間を窺ひ、往きて食物藥など與へ、常にかはらず親切に看護しぬ。老人は深く其親切を感じ、只管丁吉の不孝を歎きけれども其詮なかりき。

或日の事なりき、彼女は例の如く往きて老人を世話しつゝありしに、偶丁吉歸り來れり。彼女は急ぎ物置きに隠れたりしも、丁吉父の前に種々の食物あるを見、頻りに責め問へり。

彼女は聽くに堪へかねて飛び出で、丁吉を諫めんとせしに丁吉大に怒り、『物盗まんとて來りしなるべし』とて痛く罵りたり。

彼女は涙を流して申しけるやう、『こは思ひも寄らぬ難題を言ひかけ給ふものかな。今敢て爭はんとにはあらねど、妾が來れるは去ることにてはあらで、たゞ老人の心細からんことを悲みてなり。妾は此家を出で、[illegible]

身は常に家に在らず、誰ありて老人を養ひ申すべき。妾は老ひたる舅を棄るに忍びざるが爲め、毎日密に來りて看護しつゝあるのみ』と。

彼は聽て暫らく思案の躰なりしが、忽ち悔悟面に顯はれて、深く彼女に謝し、『以後は心を改め。孝行を盡すべければ、願くは御身も再び歸りて共に父に事へくれよ』と請へり。是に於て彼女は大に喜びて遂に元の夫妻となり、彼も是よりうつてかはりて孝子となり、一家睦まじく暮しけりとなん。

ア、至誠の動す所、遂に不良の徒を化したり。婦人の涙もこゝに至りて、貴きこと極まると謂ふべし。

時事一斑

斯心有て始て戰ふべし

聞く、

平壤の戰　大島少將の軍中一中隊將校悉く戰死若くは負傷して指揮するものなく、纔に下士中曹長若くは給養軍曹を餘すのみ。而して彼等依然彈丸雨飛の指定地にありて一歩も退かざりし。

大孤山冲の海戰赤城艦七百噸の小身を以て敵の大艦四隻と戰ふ。艦内第一の負傷者として一番分隊長引入り、第二番目に艦長即死、第三に航海長負傷し、艦の主腦たるべきものなし。乃ち二番分隊長代て司令を掌り殘る將校は分隊士一人のみ、幾んど號令者を盡さんとしたり。而して航海長は入ること八分にして再び艦頭に顯はれ、二番分隊長に號令して曰く、『もう死ぬからしつかりやれ』。

松島艦副艦長向山氏曰く、『余は戰鬪中甲板を通行せしに、一水兵身十餘創を被り、特に其の面部は目となく鼻となく腫れ上りて氣息奄々たるあり。余を見て副長と呼ぶ。余は何用なるかと言へば、彼は苦し

き聲を出して問うて曰く、「定遠はまだ沈ませぬか」。余「心配するな定遠は最早發砲し能はざる迄にやつ付けたればこれから鎭遠をやるのだ」と答へたるに、彼は微笑して「ドウカ仇を打て下さい」とて其儘絶息せり。此時の余が胸中は張り裂くる計りなりき』と。

此くの如き戰話は極めて多し。是れ實に日本の士氣なり。斯の心ありて始めて戰ふべき哉。

國　民

國民新聞曰く、

古は一國の首長獨り戰ふたり。中世は將軍兵士獨り戰ふたり。否獨り戰ふにあらず、戰の起さるゝ、獨り此等よりして起されたるを謂ふなり。近世に至て戰は多く國民によりて起さる。支那征伐の如きは正しく國民的戰爭なり。正しく國民自家の發起したる戰爭なり。故に一將功成萬骨枯の時は最早今日の戰を形容するに足らず何となれば將軍は國民の爲め國民の力を集め國民の供給を以て國民の意見を代表して戰へばなり。

軍隊は國民以外のものにあらず、國民の一部曲なり。彼等が戰ふや、其國民と業を分つの點に於ては、農夫の炎天に耕す如くなり。工業家が汲々として天然力と相戰ふが如くなり。學士が天地の理を究むる如く然り。長江大河細流溪川其趣一ならずと雖、其大海を作るに至ては則一。其大海面上の蒸發氣より成るや則ち同じ。また何ぞ其間に軒輊あらんや。

鉛筆を以て戰ふ

日本今日に於ける戰爭は全く尉官の戰爭なり。彼等が數學科學は實に今日戰勝の原素たり。陸軍然り。海軍殊に然り。

故に今日戰勝の實を見んと欲するものは、此の無名の多數英雄を見ざるべからず。否、彼等が學術の力を見

ざるべからず。古の勇士は劍を以て戰ふも、今の勇士は鉛筆を以て戰ふ。

詩　歌

日清事起りてより詩歌の流行を來せり。皆以て敵愾の意氣を歌ふもの。

暗黑の東京

光明の東京が如何に盛なるかは言ふまでもなし。去れども之が反面たる暗黑の東京亦驚くべきものなること、吾人は左の統計によりて之を證するを難しとせざるなり。

都新聞の報ずる所に據れば、府下二郭四宿（三多摩郡三宿を除く）の貸座敷五百四十六戸、娼妓四千八百八人、引手茶屋百五十九戸。本年上半年の客數九十三萬九千三百三十一人、其遣ひし金四十五萬三千四百六十圓四十五錢五厘なり。豈驚くべき巨額にあらずや。

府下十五區六郡藝妓數は二千五百九十七人、内四百五十六人は十六歲未滿の小藝妓。

料理店の數は千八百四十一戸、茶屋は千五百七戸、屆出たる酌婦給仕女は九千五百二十三人。

府下十五警察にて本年上半期に密賣淫處分を受けたるは五百八十二人、内男三十六人、女五百四十六人、女の拘留日數七百三十日、科料金八十六圓五十錢なり。

又十五區内の密賣淫婦と思はるゝものは、藝妓茶屋女を除きて九千八百六十人。之を甲乙二種に分つ。

甲種は、女義太夫、英語夜學、月琴の師匠、花の師匠、女學生の下宿と稱するもの、外妾と稱するもの、針仕事の敎授と稱するもの、非職官吏長煩ひの爲め內職と稱するもの。

乙種は、桂庵、一夜目見、女按摩、銘酒屋、汁粉屋、すゝぎ洗濯、此外ひき即ち夜鷹の類。

而して其重なる巢窟は神田區第一、京橋區第二、芝區第三、赤坂區第四、日本橋區第五なりと云ふ。

又本年上半期に於ける花札製造高は六十四萬四千五百組。これは上方屋其他の專門店のみにての數なり。

軍人と書冊

或人は曰く『日本兵卒程文事の思想ある兵卒はあるまじ。何となれば彼等の到る處最も賣行きよきもの手帳なればなり』と。

然らば彼等の傷者を慰むるに平易且つ壯快なる書冊を贈る如きは、蓋し彼等に對する最好の贈物なるべし。

石黑軍醫總監言ふ。『砲煙丸雨の間を馳驅し、不幸敵彈に觸て傷を負ふ勇武なる我軍人も、病院に入りて其の平癒を待たざるべからず。此の秋の日の短きも病床に在るは春の日の永きよりも尙ほ永きを覺へ、終日無聊に苦しむべし。而して之を慰むるは書冊に如くものなけれども、記事淫猥に涉り風習士氣を害するものは讀むに害あれば、古今の軍談軍書の類殊に平假名片假名を付し、格別讀書力なき兵卒にも讀み得るものを寄贈せば、一は消閑の用となり、一は士氣を皷舞するの利益あるべし。若し志ありて寄贈する人々は其の姓名を記入せらるべし。予は之れを病院に保存し永く其厚志を忘ざるべし』と。

女子高等師範教育

女子高等師範教育方法改正せらる。

第一、高等師範教育の本旨は完全にして適良なる教員を養成するに在るへきを以て、其の學科の如きも亦た寧ろ應用的を主とすへきに、從前の學科及ひ程度は高尙にして此の本旨に副はさる事

第二、完全にして適良なる教員とは、只た學問教授の方式に通したるものゝみの謂にあらす、實地相應の經驗熟練を要せさるへからさるものなれは、其の教育の要旨を常に此の方針の下に取るへき事

第三、高等師範教育は、重もに尋常師範教育の程度に照らし、精深に教授するを主とすへきものなるに、從前の方法は概して理論に偏し應用に乏しきの傾きありし事

是等は其改正せられたる要旨なり。蓋し井上前大臣の遺意に出ると云ふ。

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行